
【スマブラ】逆転王子【逆転裁判パロ】

crane043

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【スマブラ】逆転王子【逆転裁判パロ】

【Nコード】

N0493W

【作者名】

crane043

【あらすじ】

この小説は「大乱闘スマッシュブラザーズDX」に「逆転裁判」の世界感をくわえた二次創作の小説です。

登場人物はあくまで任天堂のキャラに限定し、「逆転裁判」に出演する人物は一切でません。

主人公はマルス、助手はゼルダという形で進めていきたいと思いません。

「逆転裁判」とおなじく実際の法律とは多少異なる部分もあります。

そして、登場人物や世界観の魅力やイメージを壊してしまう場合もあると思いますが、「スマブラならではの逆転裁判」を目指して書いていくつもりです。

タイトルに【逆転裁判パロ】と記されてありますが、シナリオはすべてオリジナルです。

プロローグ

暗闇に包まれたとある部屋、

高貴な服を身に包んだ女性がソファアの上に横渡っている。

その付近には床に身を伏せている赤髪の少年。

彼の頭部からは一筋の

血

「ハア・・・ハア・・・」

「・・・何で・・・、何で私がこんな目に・・・！」

息を荒げて独り言を囁いているのはピンクのドレスを着た女性であった。

彼女はかなり動揺している様子であったが、

手にしていった鈍器に目を付けた途端

顔元にかすかな微笑が移り始めた。

「……その子、この子が……」

法廷パート前編（前書き）

話の中で「」に入っていない文章は基本的にマルスのモノローグですが、逆転裁判にも使われている「主人公の心の声」は別として（）にくくってあります。

やはり逆転裁判に心の声は欠かせませんよね

法廷記録：

<事件概要のメモ>・・・昨夜の午前1時半、ロイ・フェレが鈍器で頭を殴られ重症、そして気絶。

法廷パート前編

- 12月26日 午前11時25分 -

- イメージ地方裁判所 第2被告人控え室 -

「・・・うわぁ・・・、予想以上にきんちょうするなあ」

僕はそばにあるソファーにも座らず、あちこちに歩きながらため息をついた。

「マルス王子！」

綺麗な声が聞こえる。

その声の主はゼルダ姫。僕が今いる組織、「スマッシュブラザーズ」にいる数少ない女性のひとりである。

「今は弁護人なのに、そんなオロオロした様子じゃ先が思いやられますよ」

いや、いきなり素人が弁護人まかせられたってそりゃ焦るだろ・・・
。・・・というか

「ゼルダ姫・・・、ちよつといい？」

「何ですか？」

「君自身は今回の事件の依頼人、というか被告人・・・のはずだよ

ね？何で君はそんな落ち着いているんだい？」

彼女は真剣な顔で僕を見つめていた。整った顔立ちのせいかわ威圧感を感じてしまい、僕はさらに緊張してしまう。

「マルス王子、私はこれでもハイラルの“王女”としての役割をこなしています。この位のことでは動揺していたら、国の一つなんて率いられないですよ」

(僕も一応、国を抱えているんだけどな……)

「それに……」

「？」

「私は信じていますから。マルス王子が私を助けてくれるのを」

「そ……、そうか。あはは……」

思わず苦笑してしまった。

- 同日 午前11時30分 -

- イメージ地方裁判所 第2法廷 -

法廷の中は傍聴人の話声で溢れていた。

そんなザワザワとした環境の中、僕は弁護席から検事席に立っている青年に注意を払っていた。

彼の名はリンク。

ゼルダ姫の率いる国、ハイラルに住む勇者。

僕の親友であり、今回の場合はライバルともいえるだろう。

・・・しかし、何故勇者である彼が姫であるゼルダを有罪に・・・？

僕が考えている間、裁判長が木槌をたたく。

「それではゼルダ姫の法廷を開始したいと思います」

「ベ・・・弁護側、準備完了しております」

思いつけていた僕は少し慌てながら返事をした。

「検察側、おなじく」

「では早速検察側、冒頭弁論をお願いします」

「あ、ちょっとよろしいですか？」

僕は口を挟む。

「・・・何でしょうか、マルスくん？」

「その・・・、なんとというか・・・。何であなたがそこに座っているのですか、・・・マリオさん」

僕の言うとおり、その裁判長席にいるのは間違いなく赤い帽子を被って髭がナイスミドルのマリオさんだ。

「ああ、いやいや。これにはちょくつとした深いわけがありました」

(どっちだよ・・・)

「マルス、それはあえて今関係あるものだと思うか？お前だって素人の分際でそこに立っている訳だ。お前が今そこに立っていられるということは、マリオさんが裁判長席に座れても当たり前なんだよ」

(んな訳あるか！！ていうかマリオさんも君も素人だろ！！)

マリオさんが咳払いをする。

「えー、では改めて、冒頭弁論を」

「了解」

リンクは法廷ファイルを取り出した。

「昨夜の午前1時半、スマブラの本部である屋敷の2階の応接室で被告のゼルダ姫と被害者のロイ・フェレ少年がいた。その時起こった事件は被告の鈍器による被害者への暴行である」

「え？殺人事件じゃないんですか？」

僕がふたたび口を挟む。

「フウ……。まったく、どうやら弁護人は宿題をやり忘れてきたようだな」

リンクがそういうと法廷に傍聴人の笑い声が少し聞こえた。

「静粛に！ 辩护人、ちゃんと事件概要を理解しているのですか？」

裁判長が僕に問いかける。

実はこれは急な依頼だったもので、法廷記録は全て開廷5分前に渡されたものである。

「いや、これはその……」

「口答えは聞きませんよ」

（ええー……）

まったく、最近の刑事ドラマとやらのおかげで「事件Ⅱ殺人」という定理が身に染み付いてしまったみたいだ。

「続けてもよろしいだろうか？ 先ほど言ったように被告人は被害者の少年を鈍器で一発かました。しかし少年は撲殺はされなく、幸い気絶で済んだようです」

「やれやれ物騒ですね、まったく」

裁判長がため息をつく。

「ところで、そのドンキーとは一体どういう・・・？」

「鈍器です。裁判長」

リンクが軽くツツコむ。

「使用された鈍器は応接室の中央のテーブルに置かれていた置時計です」

「置時計・・・？」

「そう。デザインは部屋のテーブルに合わせてクリスタル製。それに時計の機械も加えてあるのでそこそこの重量はある。さらに時計を発見したときに血痕は無かったが、鑑識にまわしたところ血液反応がハッキリ出たそうだ」

（凶器は置時計で間違いなさそうだな・・・）

証拠品<クリスタルの置時計>を法廷記録に入れた。

「なるほど・・・。そして私が思う限り、置時計はテーブルとセツトであり、被害者はその場にあつたもので襲われた。つまり計画的犯行の可能性は低いということですね！」

マリオさんがどや顔でわかりやすい推理を終える。

「さすが裁判長！見事な推理です！」

リンクがよいしよする。

「ダテにミスター・ニンテンドーを名乗っていませんからね。ホッホッホッ」

(何この接待。というかミスター・ニンテンドーは関係ないと思う)
リンクが弁論を続ける。

「そして被害者の血液は置時計だけではなく、ソファアーカーペットにも付着していたが……。あと一つ、血痕はとても重要な場所に付着していた」

(いやな予感……)

「そう。被告人、ゼルダ姫の衣服にべつとりと……!」

ザワ……ザワ……ザワ……

リンクの熱のこもった言葉により傍聴人がざわめきだす。

「異議あり!」

僕は異議を唱えた。

「被告人の衣服に血が付いていたというだけで、彼女がロイを殴ったということにはなりません!」

「異議あり!……マルス。人の話は最後まで聞くのがマナーだぞ」

「そうですよ、弁護人」

(怒られてしまった・・・)

「弁護側のいうとおり、衣服の血痕だけで被告人の有罪は決定的にならない……。しかし、残念ながら検察側には貴重な証人を呼んでいる」

(まさか・・・)

「目撃者」・・・ですね」

ゼルダ姫がゆっくり言った。

(そんな……。目撃者がいるなんて、こっち側は圧倒的に不利だぞ……！)

僕は彼女に気づかれないよう、心の中で弱音を吐く。

「マルス王子、心配はいりません。リンクが目撃者を召喚しようとして私は無実です。とにかく証人がきたら言うことを聞いてみましょう」

(・・・心の中を読まれてしまった。しかし彼女のいうとおり、証言を聞けばなにか掴めるかもしれないな)

マリオさんが木槌を叩く。

「では検察側。証人を入廷させてください」

「了解。ではこの法廷にこの事件の目撃者、

ピーチ姫を証言台へ！」

くっくくく

法廷パート前編（後書き）

検事は御剣検事のイメージが強いので、リンクがどうしても少しか
たい口調になってしまふ・・・。

法廷パート中編（前書き）

ピーチの自己紹介の時、名前が「ピーチ」だけだと少し寂しいので
ちよつと付け加えました。

マリオ64のオープニングを参考。

法廷記録：

<事件概要のメモ>・・・昨夜の午前1時半、ロイ・フェレが鈍器
で頭を殴られ重症、そして気絶。

<クリスタルの置時計>・・・今回の事件の凶器。デジタル時計で
はなく、針で時間を刻む。そこそこ重い。

法廷パート中編

- 同日 午前11時40分 -
- イメージ地方裁判所 第2法廷 -

証言台に1人の女性が立った。

少しおっとりとしているが・・・ゼルダ姫と同じく、こんな暴行事件とまったくと言っていいほど不釣り合いでキレイな人だ。

リンクが口を開く。

「名前と職業を」

「ピーチ・トードステュール。キノコ王国で姫を勤めていますわ」

「マルス王子。いつも気になっていることなのですが・・・」

「えっ、なんだい？」

ゼルダ姫の急な質問に思わず聞き返す。

「国の王族・・・、というのは職業といえるのですか？」

「・・・少なくとも、僕はちゃんとした職業についているつもりだ」

裁判長が木槌を強く叩く。

「コラッ！ 弁護人！ 審議中はイチャイチャしない！」

「してませんよー!!」

僕は検察側に目を向ける。

「.....」

(あれ?リンクが珍しく絡んでこないな.....)

「あの.....。私はまず何を証言すればいいのでしょうか?」

ピーチが証言台から弱々しく声を出す。

「ああ!ピーチ姫、これは失礼!!」

マリオさんが慌てて木槌を叩く。

「えー、ゴホン。それでは証人。昨晚、屋敷の応接室で目撃したことを証言してください」

<証言 開始> 昨晚みたこと

「えーと昨日の夜、私は中々寝付けなかったから応接室にいった本を読もうと思いましたが。だけど応接室のある廊下へ曲がったとき、ゼルダ姫が部屋からかけ足で出て行くのを見ました。それ以外に変わった様子はなかったなので部屋に入ったら.....、ロイクくんが頭から血を流して倒れているではないですか!私.....、びっくりして腰

を抜かしてしまいましたわ！気を落ち着かせたあと、急いでマスタ
ーハンドにかけつけて報告しました・・・」

「なるほど・・・。しかし被害者が倒れている光景を見て気絶せず、
しっかり落ち着いてから報告しにいくとは・・・なかなか勇敢な行
動でした！ピーチ姫」

マリオさんが感動の言葉を送る。

「まあ！ありがとうマリオ！」

「その勇気で自力でクッパから逃げてくれれば楽なのですが・・・」

「何かいいましたか・・・？」

「あつ、いやいや！何でもありません！」

（マリオさん・・・。愚痴は心の中でいうことだな）

木槌がふたたび叩かれる。

「では弁護士、尋問をお願いします」

「じんもん・・・」（物騒な響きだなあ・・・）

「マルス王子・・・。法廷で尋問する際、やることはわかっていますね？」

証人の証言をよく理解して、法廷記録にある証拠品とムジユンするものがあれば迷わずつきつけるのです！」

「でもゼルダ姫。今の証言と証拠品を比べてみても、ムジユンするところはないと思うんだけど・・・」

「証拠品がなければ”ゆさぶる”を使ってみてください。詳しい話や新しい証言など聞けることもあり、まれにそこからムジユンにツッコめることもあります！」

(ゆさぶる・・・ね。色々と探ってみるか)

<尋問 開始> 昨晚みたこと

「ピーチ姫。寝付けなかったのはわかりますが・・・、何故わざわざ応接室へ？」

「あゝ、それはですね。私、結構気に入ってるんです。あの応接室」
彼女は続ける。

「私が特に気に入っていたのはあのテーブルと同じデザインの置時計だったのですが・・・、今はロイくんを殺めてしまった恐ろしいものとしか見えません・・・」

(ロイは死んでいないんだけど・・・)

「あつ！私もあの時計、面白いので気に入っています」

ゼルダ姫がいきなり割り込んでくる。

「面白い”・・・?”」

「そうなんです。実はちょっとしたシカケがあつて・・・、マスターハンド様に頼まれてハイラルから仕入れた石で出来ているんです」

「へえ・・・」（一体、どんなシカケが・・・）

「でも・・・そのままの姿では見た目が悪かったので、本来のデザインとかなり変わってしまいましたけど・・・」

「さ・・・散々な目にあつてきた石だね・・・」

<クリスタルの置時計>の情報を法廷記録に追加した。

僕は証人に視線を戻した。

「ちなみにピーチ姫。もう一つ聞きたいことがあります」

「何でしょうか？」

「ゼルダ姫が部屋からかけ足で出て行ったこと以外に、何か変わった様子はなかったのですね？」

「はい。モチのロンですわ」

(古っ……)「……しかし、それはおかしいですね」

「えっ……?」

彼女は少し動揺した表情を見せる。

「弁護人。説明を」

「はい。皆さん、先ほどの検察側の熱い冒頭弁論を思い出してみてください
ください」

”あと一つ、血痕はとても重要な場所に付着していた
そう。被告人、ゼルダ姫の衣服にべつとりと……!”

「た……確かにそうおっしゃいましたな、リンクくん!」

「……はい。間違いなく言いました」

(よし、リンクも認めてくれたぞ!)

「ピーチ姫。ゼルダ姫の服に血がベツトリとついていたというのに、

何故”変わった様子はない”と思ったのですか!?!」

「!?!」

ざわっ……！ ざわっ……！

僕の指摘により傍聴人が騒ぎ出す。

「静粛に！静粛に！」

確かに弁護人の言うとおりです！ 証人、説明を！」

「……それは……」

「証人！」

「……あまり急かさないで下さいます？マリオ」

ピーチ姫の表情が強張る。

「あっ……はい……「うめんなさい」

（弱え……！）

「……確かにマルスクンのいうとおり、ゼルダ姫の服に血が付いていたかもしれませんが……とても気づけるものではなかったと思います」

「なっ……一体どういう……？」

「ていでん……」

「えっ？」

「停電していたのです。屋敷は昨晚……」

（は……初耳だぞ）

「そ、それは本当なのですか？リンクくん」

「はい。一応調べておきましたが、確かに昨日の午前1時から2時まで屋敷全体は停電状態だったそうです。本件とはあまり関係ないと思っていましたが……、そうでもなさそうですね」

「そうですか。その停電の記録を証拠品として受理します」

<停電の記録>を法廷記録に入れた。

「ちなみに、屋敷の地下のブレーカーはキノピオが戻してくれたそうです」

「キノピオ……？」（確かピーチ姫のしもべだったような……）

「そうですね。私がマスターハンドに報告したあと、キノピオを地下に送りました」

「そしてブレーカーのスイッチにキノピオの指紋が付いていたこと

もあり・・・ウンではなさそうですね」

「なるほど・・・。いやあ、あのブレーカーは高いところにあると
いうのに・・・。」
「ご苦労様ですね！」

(それはマリオさんの身長が低いだだけだと思っ・・・)

「・・・」

ゼルダ姫が何か考えこんでいる様子だ。

「どうしたんだい？」

「いや、キノピオ様がブレーカーを上げたということになると・・・
もちろんすぐそばにあったハシゴを使ったことになりますね」

「・・・ハシゴじゃなくて キヤタツね」

「えっ、何か違うのですか？」

・・・もつと本質をみましょうよ、マルス王子」

「ははは・・・」(何、この会話・・・)

<キヤタツ>の情報を一応、法廷記録に入れた。

裁判長が木槌を叩く。

「それでは証人。停電のことを付け加えて証言をお願いします！」

<証言 開始> 停電中にみたこと

「確かにあの時は屋敷全体が少し暗くて停電していましたが、応接室の場所は大体わかっていたので到着するには問題なかったです。ゼルダ姫が部屋から出て行くのを見ましたが、暗くて服に血が付いていたかどうかは分かりませんでした。でも、部屋の中を覗いてみた際、ロイくんが倒れているのは見えました。時間はハッキリ、午前1時半と覚えています！」

「ふむ……。暗い廊下を明かりなしで歩きぬくとは……。相変わらずおてんぱなんですな、姫。私は暗いところでは思わず赤ん坊に頼っていましたよ」

「一体なんの話ですか……」

「マリオさんの冒険にも色々あるっていうことだよ、マルス」

木槌が叩かれる。

「それでは弁護士。尋問を」

<尋問 開始> 停電中にみたこと

「目撃した時刻は1時半・・・であっていますね？」

「間違いありませんわ」

僕はさらに追究する。

「しかし停電中だったのでしょう？よく時間が分かりましたね」

「そんなの簡単です。時計さえ見れば流石にわかりますわ」

「なるほど。・・・ちなみに、時計は一体どのようなものを？」

「それはもちろん、応接室にあつた置時計・・・」

彼女の口が止まる。

だんだんと見えてきた・・・。この事件の真相がっ・・・！

「異議あり！」

<クリスタルの置時計>

~^~U~U~

法廷パート中編（後書き）

少し中途半端なところで終わってしまいました。

だからだと長い話を一気に載せないために、話のバランスを取るため3パートに分けました。

後編はすでに出来ているので、すぐに載せると思います。

法廷パート後編（前書き）

大学の都合で投稿が遅れてしまって申し訳ありません……。しかし、「逆転」のシナリオ作りって本当に時間がかかりますね。ちよつとでもおかしな所があれば、いっぱい書き直さなきゃいけないこともしばしば……。

法廷記録：

<事件概要のメモ>・・・昨夜の午前1時半、ロイ・フェレが鈍器で頭を殴られ重症、そして気絶。

<クリスタルの置時計>・・・今回の事件の凶器。デジタル時計ではなく、針で時間を刻む。そこそこ重い。元はハイラルから仕入れた石で、ちよつとしたシカケがあるらしい。

<停電の記録>・・・昨日の午前1時から2時まで屋敷は停電状態だった。地下のブレイカーはキノピオが上げたらしく、指紋もしっかり付いている。

<キヤタツ>・・・キノピオがブレイカーを上げる際、使われたと思うもの。「ハシゴ」ではない？

法廷パート後編

「異議あり!」

<クリスタルの置時計>

「……これはこの事件の凶器ですね?」

マリオさんが思わず僕に問う。

「そうですが……この際は元の”時計”として見ていただきました
よう」

「”時計”として……と言われましても、今時のデジタルでもな
いレトロのアンティークとしか……」

僕の強張っていた口元が少し緩み、不適な笑みが浮かび上がる。

「そのとおりです、裁判長。デジタルではないからこそ、証人の話
にムジユンが顔を出す!」

僕は両手で机を叩く。

「くらえ!」

< 停電の記録 >

「弁護側は証人に問います！
屋敷が暗い停電の時に、

一体どうやって時間を置時計で1時半と特定できたのですか!？」

「っ……!？」

ピーチ姫の顔に焦りの色が出る。

反対の検察側から声上がる。

「異議あり！」

証人は事件発生時刻に時間を見たとは限らない!

午前1時半より前か後に時間を見て、目撃した時刻を推定すること
も……」

「異議あり！」

証人は先ほどの尋問で”置時計で時間をみた”と言いました!」

「なら説明してみろ!！」

リンクが片手で机を叩く。

「彼女は一体どうやって置時計で時間を知ったんだ!？」

木槌が叩かれる。

「そうですね。弁護人に証拠品の提示を命じます。

ピーチ姫が置時計で時刻を知った方法を示す証拠品を！」

（・・・確信はないが、わずかな可能性を逃すわけにはいかないっ
・・・!）

「くらえ！」

<クリスタルの置時計>

「・・・これは僕もついさっき知ったことなのですが、この時計にはちょっとしたシカケがあるそうです」

「シカケ・・・?それは一体どういったものですか?」

ゼルダ姫にアイコンタクトを送る。彼女は答えるようにつなずく。

「シカケ・・・というほど大したものではないのですが、

この時計には時刻をアナウンスする機能があります」

（やっぱり・・・!僕のカンは当たっていた!）

「じ・・・時間をアナウンス・・・?一体どうやって作動するのですか?」

マリオさんが手に持った置時計を色々な角度から調べだす。

「作動のスイッチは その時計全体です。
時計自体を軽く小突くとアナウンスが始まります」

「ほお・・・それは面白い！では早速・・・」

マリオさんが木槌で時計を軽く叩く。

<・・・・・・>

<ボヨヨヨーン!!>

<ただいま 1:30 です!>

「・・・これはズイブンと特徴的なアナウンスですね」

「ゴシップストーンか・・・。なつかしいな」

リンクがしんみりした顔でつぶやく。

しかしその表情はすぐにオドロキに変わった。

「!？」

「い・・・、今時間は何時だと言った!？」

「一時半・・・、といたしましたね」

僕が代わりに答える。

「裁判長！今の時刻はなんでしょうか！」

「えっ、え」と。

午前11時56分・・・！まったく違う時間です！

となると、この時計は・・・」

「壊れている・・・ということになりますね」

ざわっ・・・！ざわっ・・・！

「静粛に！しかし何故よりによって事件発生時刻に止まって・・・」

「その答えは簡単。」

この時計はまさに事件発生時刻に壊されたのです！

そう・・・。軽い小突きと比べ物にならない重い衝撃によって・・・
「！！」

ざわっ・・・！ざわっ・・・！ざわっ・・・！

傍聴人がさらに騒ぎ出す。

「静粛に！ 静粛に！ 静粛に！」

重い衝撃といえば……、被害者を殴った衝撃としか……」

僕は大きくうなずく。

「そのとおり！」

午前1時半、

時計のアナウンス、

重い衝撃、

この3つのパーツを合わせて出てくる答えはただ一つ……！

ロイを時計で殴って、時計を壊して、そのときアナウンスを聞け

た犯人……

それはピーチ姫……あなたしかいません！！！！」

「なっ……、何ですっとおおおおお

！！！？？」

法廷内の騒ぎは最高潮に達した。

マリオさんもリンクもオドロキの顔を隠せない。

僕は証言台に注意をはらうが……ピーチ姫は顔をうつむけたまま
上げない。

黙認するつもりなのかもしれないが、

僕は追求を止めるつもりはないっ……！

「ピーチ姫。あなたは停電中の暗闇の部屋に忍び込み、机の上という決まった位置にある置時計を手に取り、被害者のアタマを殴りつけた！

しかしあなたは大変驚いたはずですが……。なんせ凶器がしゃべりだしたのだから。

その時計がアナウンスした時刻があなたの脳裏に焼きついたからこそ、

先ほどの証言で午前1時半と時刻を特定できた！」

僕は思い切り机を叩き、顔突き出す。

「どうですか！？ ピーチ姫っ！！！」

「……………」

クスッ

「アア ツハツハツハツハツハツ！！！！」

静まり返った法廷のピーチ姫の高笑いが鳴り響く。

「しょ．．．証人．．．ピーチ姫．．．？」

マリオさんもあまりの態度の変化についていけないようだ。

完全に追いつめた．．．

．．．はずだった！

「残念．．．

本当に残念だったわね．．．

．．．マルスくん！！」

「！？ な．．．何だつて！？」

彼女はにやけた顔で反論を始める。

「マルスくん。あなたの主張は確かにスジが通るわ。

暗い部屋に入り、決まった位置にある時計を手に取り、ロイクンを殴った。

．．．まさにそうかもしれない
だけど．．．

それはあなたの隣のゼルダ姫にも出来たことではなくって？」

「っ……!？」

ざわっ……ざわっ……

彼女の主張により、法廷が再び最初の方角へと傾きなおした。

リンクが咳払いをし、ピーチ姫の主張を代わりに続ける。

「確かにそうだ……。いいところを付きましたね、ピーチ姫。

どうだ、マルス？

反論……。いや、立証できるか？

”ピーチ姫がロイを殴った”ということを「

(……。最悪の展開だ……!)

いくら僕の主張のスジが通るとはいえ、それは誰にでも当てはまるじゃないか……!)

「そしてマルス。お前の主張には致命的なムジユンがあるんだよ」

「えっ……?」

リンクはため息をつきながら説明を始める。

「いいか？ 仮にピーチ姫がロイを殴るとしよう。

しかし、それは彼女が暗闇の部屋に忍び込むことになるんだ。もちろん被害者に気づかれなかったために。

そして、そのようなことが起こるには、ピーチ姫が停電になるこ

とを事前知っていなきゃならないんだよ!」

検察側の机が叩かれる。

「もしピーチ姫を犯人と告発するなら、このことを立証してみる!」

「い、異議あり!それならゼルダ姫にも同じ疑問が当てはまるじゃないか!」

「異議あり!そんなこと立証する責任は俺たちにはない」

やれやれといわんばかりに首を横にふるリンク。

「ゼルダ姫の衣服に付着した被害者の血・・・これだけで彼女の有罪の立証はジユウブンだ!」

「ぐっ・・・!」

「どうなのですか、弁護人?

立証できるのですか?ピーチ姫が停電を事前知って被害者を殴ったことを」

(・・・くそ!出来るか、そんなこと・・・!)

「うふふ・・・。まったく心外ですわ、マルスくん。

わざわざ証言しに来た私を犯人に仕立て上げようなんて・・・」

「弁護人!どうなのですか!」

マリオさんの声は確かに聞こえる。

しかし、僕の頭には立証の方法などまったく思いつかない……。

「べ、弁護側は立証の準備は……」

「待った！」

法廷にキレイな声が鳴り響く。

その声の主は僕の隣にいる人物だった。

「ぜ……ゼルダ……」

……じゃなくて、ゼルダ姫！」

「あきらめてはいけません、マルス!!」

彼女は真剣な眼差しのまま、僕の名を呼ぶ。

「だ、けど……ピーチ姫が昨日の夜、停電が起こることを知っていたことを立証するなんて……」

「……確かにそうですけど……」。

「ここは試しに、”発想の逆転”を試してみたらどうでしょう」

「は……発想の逆転……?」

「そうです!」

「ここは”停電することを事前に知った方法”を証明するのではなく

”停電が起こった方法”を考えるのです!」

「……!?!」(停電が起こった方法!)

「どうやら弁護側には何か考えがあるようですね」

「……はい!弁護側は証拠品を提出したいと思います!」

「いいでしょう」

木槌が叩かれる。

「では、証人が停電を事前に知った方法を示す証拠品を提示してください!」

「くらえ!」

< 停電の記録 >

「こ……これは停電の記録ですね」

「いいですか？ 検察側の説明によると停電が起こった際、屋敷のブレーカーを上げたのはキノピオだった……。間違いありませんね？」

「ああ。確かにそうだ」

「弁護士。これに何か問題が？」

「屋敷のブレーカーは比較的高い位置にあると先ほどマリオさんから聞きましたが、わざわざキノピオさんにブレーカーを上げることを頼むのは不自然ではないでしょうか？」

「異議あり！」

何を言ってる？ キノピオの身長がいくら低くても、彼の指紋はブレーカーのスイッチから取れている。彼がスイッチを上げたのは間違いのないんだ」

僕は首を左右に振る。

「指紋が残っている……。ということは間違いありませんね。」

彼がスイッチに”触れた”ことは「

「!・・・何がいたい?」

「マリオさん。あなたの身長なら屋敷のブレーカーを上げる際、ど
ういう手段を取りますか?」

「・・・少々馬鹿にされてる気がしますが、そうですね・・・。
その場にある棒を使って上げますかね」

「そのとおり。」

そしてそれはキノピオさんも同じ条件に当てはまるのでは?」

「!?!?・・・それは」

「ブレーカーのスイッチには彼の指紋がしっかり付いている。
しかしそれはブレーカーを上げて付着したものは考えにくいも
の・・・。」

それなら指紋が付いた理由はただ一つ・・・!

キノピオさんがブレーカーを下ろしたからです!!」

「・・・」

ピーチ姫は証言台で汗をながしながら固まっている。

それを確認してから僕は主張を続ける。

「すると、先ほどピーチ姫がキノピオさんにブレーカーを上げると
いう命令をしたという証言はまったくのウソ!!!」

彼女はロイに闇討ちをするためにキノピオさんにブレーカーを落

とさせた！」

「……………」

僕は机を叩き証言台をにらんで叫ぶ。

「違いますか……………」

ピーチ姫っ！！」

法廷内は完全に静まっていた

永遠に続くと思われる無音

しかしそれはすぐに打ち破られた

僕の周りにいる者全員による大きな拍手によって

「・・・・・・・・えっ」

僕は呆然と立ち尽くした。

今まで証言と尋問、そして討論によって重苦しい雰囲気だった法廷が急に暖かくなった。

マリオさんは木槌を下ろし、口を開く。

「おめでとう、マルスくん。」

「どつやら合格みたいだ」

「えっ?・・・ゴーク?」

「・・・まったく、慣れない演技をさせられて大変でしたわ」

先ほどのピーチ姫の焦り顔は急に、疲れきったものになった。

「演技・・・???」

(一体何がなんだかわからない・・・)

「まったく、急な展開でついていけないようだな・・・マルス」

法廷の真ん中に一つの白い手が現れる。

「ま・・・マスターハンド!!」

「見事な弁護士っぷりだった。・・・リンクが推薦しただけはあるな」

「えっ・・・リンクが?」

「このままでは混乱しておかしくなってしまうそうだな・・・。マルス、リンク、マリオ。」

早くこの法廷を閉めて、1時間後に本部の私の部屋に来てくれ。
そこで全部話してやるう」

そう言い残してマスターハンドはすぐに消えた。

そしてマリオさんは木槌を持ち上げ、台を叩く。

「皆様、おつかれさまです。

本日の法廷はこれにて閉廷します！」

- 同日 午後12時10分 -
- イメージ地方裁判所 第2被告人控え室 -

「お疲れさまです！マルス王子」

ゼルダ姫は僕に祝福の言葉を送る。

「・・・ゼルダ姫。

マスターハンドが後で説明してくれると言っていたが、

一体何が起こっているのか君の知ってる範囲で説明してくれない
か？」

「ああ、確かに少しついていけないような顔をしてましたね」

(少しどころか全てわからないんだが・・・)

「マルス王子。」

ロイが殴られた暴行事件なんて、最初からないことなのですよ

「えっ・・・」

「この法廷と審議はマスターハンド様がセットアップしたもので、
全てはマルス王子、あなたの弁護士としての素質をはかるための
テストだったのです」

「なっ・・・」

なんだってええええええ!!?」

僕は思わず叫んでしまう。

「まったく気がつかなかったようですね」

ゼルダ姫は手を口に当て少し笑う。

確かに、この事件と審議を思い返すと不自然な点が多い。

リンクがゼルダ姫の有罪を立証しようとするし、

ピーチ姫がロイを殴る動機なんて考えられないし、

僕がピーチ姫を告発したのにマリオさんは何も反論しなかった。

しかしそのことに僕はゼルダ姫の弁護に必死でゆっくり考える暇もなかった。

(・・・何か・・・気が付かなかった自分がすごく情けない)

「あの・・・マルス王子」

ゼルダ姫が少し照れながら僕を呼ぶ。

「えっ、どうしたの？」

「・・・先ほど、法廷で思わずあなたの名前を呼び捨てにして呼んでしまったことをお詫びしたいのですが・・・」

「ああ、それなら気にしなくていいよ」

(・・・僕も君を一瞬呼び捨てにしちゃったし)

「あ、ありがとうございますー！」

彼女の耳が少し赤くなる。

いつもしっかりした彼女なのでちょっと新鮮な感じがする。

「もし君がよければ、これからもそのまま”マルス”でいいよ」

「え、いいのですか？」

それなら私も”ゼルダ”と呼んでくださって構いません！」

「ははは、このほうが余り堅苦しくなくていいかもね」

僕たちは互いに礼と別れの言葉を言って、裁判所を後にした。

そして僕は屋敷へと戻り、マスターハンドの部屋へと向かった。

くっくくく

法廷パート後編（後書き）

エピソードへと続きます。

エピソード（前書き）

この部分を書いているとき

「あれ？これ法廷パートじゃなくね？」

と感じてしまったので、後編とエピソードに分けました。

エピソード

- 同日 午後1時15分 -
- スマッシュブラザーズ本部 マスターハンドの部屋 -

法廷から出て約1時間。

僕はやっと本部に戻り、目的地の部屋の前に行く。

(・・・ちよつと遅れてしまった)

僕はドアに軽くノックする。

「入れ」

言われたとおりノブを回して部屋に入る。

そこは机、椅子、ランプなど無駄のない一般的なオフィスのような部屋だった。

(・・・マスターハンドはここに住んでいるのか・・・?)

部屋にはマスターハンドと僕と一緒に呼び出されたリンクとマリオさんもいた。

「15分遅刻だぜ、王子さま」

リンクが僕を茶化す。

「まあまあ。主役が遅れるのもお約束じゃないか」

リンクとマリオさんの言葉を無視し、僕は本題に入る。

「・・・マスターハンド。ゼルダから聞きました。

先ほどの審議は僕の弁護の能力をはかるためのものだったので
ね」

「そっだ」

(意外と即答だな・・・) 「しかしそれは何故・・・」

「マルス」

僕の言葉をさえぎり、マスターハンドは目もない姿で僕を見つめる。

「・・・この世界を作ったのは誰だか分かるか？」

急に電波を質問を繰り出されたが、僕はその答えを知っている。

「・・・あなたです。他に誰がいるんですか」

「そのとおり」

彼は親指を人差し指をこすりあわせる。頭(?)の中でこれから説明することを整えているのだろう。

「……このスマッシュブラザーズの者が知るとおり、私が”この世界”の創始者だ。

私がいちから作って、君たちも含む多数の人々がそれぞれ自由に生きている。

これがこの世界の基本的なあり方だ」

……この話は前に一度聞かされたことがある。僕がこの組織に参加したときだ。

マスターハンドは続ける。

「しかしそれだけでは足りなく、私のワガママは納まってくれない。」

彼自身がコブシを握る。

「私は君たちも納得できるような理想郷、ユートピアを作り、ともに育みたい……！」

それは君たちが自分の周りのワクをぶち抜け、様々な強敵と戦い、ふっ飛ばしあうことが出来る自由な世界……！」

戦うことで自分をすべて表現できる世界……！」

・・・そう、このマスターハンドという人は病気と言っていていいほどのバトルマニアだ。

自由に戦いが出来る世界を作るため、そのアイコンのようなものとして集めれた戦士の団体。

それがこの組織 「スマッシュブラザーズ」である。

彼は自分の熱意を思い切り語ったあと、握っていたコブシをおろす。

「・・・しかし君たちの知るとおり、己の力や技だけでは思う存分戦えない者もいる・・・。

時には戦いを共にする人を必要とする者。

そう、それは裁判の被告人のような・・・」

「！」

「マルス・・・。

これは得に恵まれることは滅多にない、損の多い役割だ。

君にはスマッシュブラザーズの戦士だけではなく、非力な者の戦いを手助けする・・・

「この世界の弁護士として目覚めて活躍してほしい」

「っ・・・!?!?」

（この僕が・・・弁護士に・・・?）

マスターハンドは手（彼自身？）を僕の肩に乗せる。

「先ほどの裁判・・・すべてを見せてもらった。

急な弁護の依頼を頼まれて、君とゼルダは最悪の状況に陥っていた。

しかしそこを君は強い正義感と頭脳で見事な逆転劇を果たした！
感動っ・・・！ 圧倒的感動っ・・・！」

彼は感涙しているのかとても震えている。

「・・・君の戦いの場を広げたいこともあるし、どうだ？」

この仕事・・・、引き受けてくれないか？」

彼はそう言うと、どこからかバッチのようなものを取り出した。

小さいが、僕を弁護士としての身分を証明するものだろう。

・・・僕は息を一回のんでから返事を始めた

「……先ほどの法廷は、僕にとってはとても苦しいものでした。ピリピリとした討論に重苦しい空気。尋問や立証をするときも証拠品だけじゃなくて自分のカンに頼ったときもあって、とても心臓に悪いことの連続でした。」

「……でも、僕は見過ごせなかった。無実の人が冤罪で裁かれるなんて……」

僕は顔をマスターハンドに向け、弁護士バッチを手に取り、言った。

「いいですよ。」

僕は今日から弁護士になります！」

そう答えた直後、マリオさんとリンクは大きな拍手を送ってくれた。

「いい答えだ」

「逆転王子の誕生だな」

「何だよそれ……」

リンクの意味不明な発言にツッコんだら、僕は思い出したように聞く。

「あつ……。そういえば法廷でマスターハンドが言っていたこと
なんだけど……」

ゼルダの弁護士に僕を推薦したのは君だったのか？」

「ああ、そうだ。」

今はまだ理由はいえないけどよ……」

でもそれはゼルダ姫の意思もあって決めたことなんだぜ？」

「えつ……。彼女が僕に弁護士の役割をして欲しかった？
……そこは普通、ハイラルの勇者の君に頼むところじゃないの
か？」

「ばーか。弁護なんて俺に出来るわけないだろ。」

役不足ってやつ？」

(使い方が違うような気が……)

「ゼルダ姫が考えていたことは分からないけどよ、
なかなかサマになっていたぜ？」

お前達、二人」

「ああ、ありがとう。」

「……………え。」

「ふたり」?

「ああ、そうそう。言い忘れていたが」

マスターハンドが再び口(?)を開く。

「今回の勝訴はゼルダの助言もあったことだし、

これからの弁護の活動は君たち二人にしてもらうことにした。君が弁護士で彼女がパートナーだ。

大丈夫。ゼルダもこの役割を引き受けてくれている」

「えっ?」

「それに君たち、結構相性良かったですよ。」

裁判長席から君たちが談笑しているのもすっかり見ていましたし」

「えっ? えっ?」

「それにいつの間にかお前、彼女のこと呼び捨てにしてるじゃないか。さ

さては閉廷後なんかあったか?」

「えっ? えっ? えっ?」

「逆転の王子と姫・・・。
中々いい組み合わせだな。
・・・いや、”カップル”でもいいか」

僕は顔全体を真っ赤にしながらゆっくり問う。

「・・・ちょっと一言、言わせて貰っていいですか？」

「」「」「」「」「」「」「」

「異議あり！」

第1章：「目覚める逆転」

くおわりく

エピソード（後書き）

やっと書き終わった・・・。

とにかく、まず言わなきゃいけない一言：

リンゼル好きの方々からの批判を覚悟して書きました！
不愉快に感じてしまった人、本当にごめんなさい！><

〜ここから先はちょっとしたメイキングの話です〜

この話は元々、僕が中学時代に思いついて書いたもので
こないだ部屋の底から引つ張り出して読み直しました。
それを色々改善して出来上がった作品がこれです。

改善する前の話はロイが被告人で、応接室で停電の暗闇の中
ゼルダの衣服をひっぺかした容疑で訴えられる事件。
ロイがマルスに弁護を頼み、そのサポートを（なぜか）ゼルダがす
るもの。

これはひどい

このときから「キノピオがブレーカーをおとした」ことが決まっ
ていて

当時はこれを思いついた自分は天才か！と酔っていたことも。
いざ、この作品を書き直してみてもスッキリしない部分がいっぱい
ある・・・。やっぱり巧舟さんはすごい。

今回の話を書いて、反省する点をすべてチェックして
次の章を書いていきたいと思えます。

次章は「逆転進化論」！

期待しててください！

主要登場人物と世界観の紹介（前書き）

ここまでなんか足りないなあ、と感じて気づいたのが登場人物の紹介がないことでした。

これはあくまで自分のキャラクターのイメージであり、人によってイメージと損なう場合もあるのでご注意下さい。

そしてこれを読む前に「第1章・目覚める逆転」を絶対呼んでください！
ちよつとネタバレ含みます！

主要登場人物と世界観の紹介

- 主要の登場人物 -

- マルス -

主人公。アリティア王国の王子。現在は「スマツシュブラザーズ」の戦士であり、「柔の剣」の使い手。マスターハンドが新しい戦いの場「法廷」を見つけ、リンクの推薦とゼルダの希望でマルスを弁護士として選んだ。正義感が強く、軍隊のリーダーとしての経験からか頭脳明晰。それに加えて温和で優しい性格の持ち主だが、何かと面倒ごとをよく押し付けられあまり幸運に恵まれない、いわゆる残念なイケメン。シーダ王女という恋人がいるらしいが・・・？
特技はツツコミとハッターリで、自慢の頭脳も駆使して熱い異議を唱える。

- ゼルダ -

聖地ハイラルの王女。「スマツシュブラザーズ」の数少ない女性戦士であり、アヤシイ魔法とその魔法で強化した体術が得意。彼女が第1章のシミュレーション裁判で被告人として選ばれたとき、リンクの推薦とともにマルスを弁護士にさせることを希望。マルスとは同じ王族としてか、良く意気投合し相性もいい。「知恵のトライフォース」の持ち主で、マルスと同様アタマがキレるがどこかが抜けている天然っ娘。少しおかしな感性を持っているが、それをき

かけに逆境の場面を逆転するときがある。

- リンク -

影の主人公。聖地ハイラルの危機を「時のオカリナ」と「マスターソード」とともに救った時の勇者・・・だったが現在はハイラルで普通に生活している。「スマッシュブラザーズ」の初代からのメンバーで、最強の剣術使い。マルスとは親友でありライバル。「勇気のトライフォース」の持ち主で、何事も逃げずに真正面からぶつかっていく超主人公体質。マリオを尊敬しており、彼が敬語を使う数少ない人物。

彼がマルスを弁護士にするよう推薦したが、その動機は不明。なにやらゼルダと関わっているようだか・・・？

鋭い洞察力と「ロジック」による謎解きを駆使して、鋭い異議を唱える。

- マリオ -

誰もが知る、史上最強の配管工。「スマッシュブラザーズ」のエキスであり、他のメンバーからの信頼も厚い。戦闘力はメンバー最強だが、あまりアタマはよろしくない。年齢に不釣り合いな老け顔が悩み。自称「ピーチとは恋仲」だが、一方的なもので彼女からは軽くあしらわれている。

すっとぼけているが、良識で裁判長としては正しい判決をくだしてくれる。

- 「スマツシュブラザーズ」の世界感 -

「この世界」（別名：イメージ世界）はマスターハンドが創ったものであり、住人が平等に戦い自由にふつとばしあうことが出来る、いわゆる遊び場のような世界。この世界のあり方のシンボルとして、マスターハンドが集結させた特別オールスター団体が「スマツシュブラザーズ」である。

しかし世界としては不完全で「平等な戦い」が出来ない者もいるとマスターハンドは感づいたとき、彼は「法律」に目をつけた。「スマブラ」メンバーの元の世界にはそれぞれ自由に作られた「法律」があり、それにそって戦いの場を広げようと考えたマスターハンドが思いついたのが「法廷」である。その場を代表とする「弁護士」がマルスに決まり、彼を弁護士として目覚めさせる。

- 物語の裁判で使用される法律とルール -

- 序審法廷制度 -

原作「逆転裁判」にも登場する刑事事件の審理の制度。基本的に起訴された被告人を有罪か無罪かを最長3日以内に決めるのが「序審」。この審理で活躍するのが主人公の弁護士マルス。

- 検察側 -

検察側は起訴する側の人間を1人代表として選ばれた人物。「この世界」には「検事」という職業はない。

主要登場人物と世界観の紹介（後書き）

以上、自分のキャラクターのイメージと世界観でした。

何で検事は誰でもいいのかと思った人もいると思いますが、
検事は色々な個性があるほうが面白いと感じ、そう決めました。

プロローグ（前書き）

ポケモンはゲームボーイの金銀までしかやっていません（キリッ
というわけで新章開廷。

今度のシナリオは丁寧にプランしました。

法廷記録：

<弁護士バッチ>・・・僕を弁護士として身分証明してくれるもの。
多分この世界にひとつしかない。

人物ファイル：

<ゼルダ>・・・ハイラルの王女。現在は僕の助手として勤めてい
る。

<マスターハンド>・・・「この世界」の創始者で、「スマッシュ
ブラザーズ」を創ったアヤシイ右手。僕を弁護士に仕立て上げた。

プロローグ

< さあ、始まりました！

カントー地方ポケモンリーグ第1回戦第4試合っ！！！>

アナウンサーの叫びにより、会場の熱気が燃え上がる。

< 両トレーナー、最初のポケモンを繰り出したあ！！！！>

< むしとりしようねん、たけるくんはスピアー！！

このポケモンを幼い少年が手持ちにもつことは大変めずらしいケースであります！！！！>

< それに対する蒼い貴公子、マルスクんはピカチュウだあー！！！！

スピアーと同じくトキワの森に生息しますが、電気タイプという
そこそこレアな可愛らしいポケモンです!!>

「スピアー！ ダブルニードル だ!!!!」

<あぁっと、ピカチュウ!! スピアーの先制攻撃をヒラリとかわ
したぁ!!!!!!>

「いいぞ！」

「反撃開始だ!!」

僕はひとさし指を突き出し、叫ぶ。

「ピカチュウ！ でんきショック!!!!」

< 出ましたあゝ

!!!! 電気ポケモンの代表技!!!!!! >

バリバリッ!!!!!!

< そして見事に命中!!!!!!!! >

「アバババババババ b b b っ!!!!!!?」

< . . . マルスくんにつ
 . . . ! ! ! ! ! >

< 「 . . . これは一体どうして . . . しょうか . . . ! ! ! ! ! >

『 気安く指示出してんじゃねえよ、エセトレーナー 』

(ち) . . . ちっぱり引き受けるんじゃなかった . . . (

. . . 今回の話は3日前から始まる . . .

- 12月28日 午後2時30分 -
- スマツシユブラザーズ本部 応接室 -

僕はとある人物(?)に呼び出され
今、2日前の裁判で犯行現場とされた部屋にいる。

シンプルな家具に囲まれた豪勢なテーブル、そしてその上にはあの
置時計が置いてある。

その時計を手に取り、軽く小突く。

<ボヨヨヨ〜ン!>

<ただいま 1:30 です!>

時計のアナウンスはまったく違う時刻を報告する。

(シミュレーションの演出だったとはいえ、本当に壊したのか・・・
この時計)

僕はそれをテーブルの上にそっと戻す。

(君も・・・散々な目にあってきたんだね)

『何、一人でしみじみとしている』

「ウォアッ!!? 居たのかミュウツー!!!」

大変なオドロキと共に僕は後ろに振り返る。

『お前をここに呼び出したのは私・・・居て当たり前だ』

「だったら部屋に入ったとき声をかけてくれよ・・・」

彼はミュウツー。

マスターハンドいわく、ポケットモンスターが生息する世界から来た遺伝子ポケモンらしい。

僕は普段ポケモンや人外の仲間とは言葉のコミュニケーションは取れていないが、

ミュウツーは”てればしー”を使って人と話せると聞いた。

「それで、何か相談ごとでもあるのかい？」

僕はさっそく本題に移る。

『いや、私は特に用などない。』

ちよつと頼みごとを聞いて欲しいやつがいる』

「頼みごと？一体、誰が？」

そういったあと、応接室の外から一匹の黄色い生物が入ってくる。

「ピッカ」

『こいつだ』

「ピカチュウ！」

スマツシユブラザーズの人外その1、ねずみポケモンのピカチュウ。可愛らしい容姿の小動物で、他の人間メンバーに気に入られている人気者だ。

「君が僕に頼み事って……一体何をすればいいのかな？」

僕はしゃがみ、彼と視線を合わせて問いかける。

「ピカピカ。ピーピカピー！」
ピカピカ」

（・・・僕に頼ってくれるのはうれしいが、
これじゃ話が進まない・・・）

『通訳してやってもいいが？』

「よろしくお願いシマス・・・」

<証言 開始> たのみごと

『ちよつと、お前にしか頼めない用事がある。俺はこの組織に加わって何年かたって、いろんな奴と戦ってきた。でも俺はポケモン。久しぶりにポケモンを相手に思い切り戦いたいんだ！今日から3日、俺の生まれのカントー地方でポケモンリーグが開催されるって聞いたから、それに出来れば参加したい。でも俺1匹じゃ無理だから、お前にトレーナーの役を頼んでいいか？』

(・・・容姿と口調がまったく噛み合っていないな……。いや、それより)

「トレーナーって・・・？」

『ポケモンバトルの際、ポケモンに指示を出し共に戦う者のことだ』

「・・・そんな役割を僕が引き受けていいのか？」

「良いではないですか。引き受けてみればいいと思いますよ」

「！ ゼルダ！」

いつの間にか入り口の方にゼルダが立っていた。

「彼の考えていることは分かりませんが、ピカチュウはマルスに大きな期待を寄せているはずですよ。」

依頼人の期待に応えるのも弁護士としての務めだと思います！」

(・・・何かそれとこれは違うような気がするけど、引き受けてみるか)

「いいよ。仮のトレーナーとして一緒に戦おうじゃないか！」

「ピカ！」

『よかったな、ピカチュウ』

「話は聞かせてもらった！」

突然の声と共に白い手が現れる。

「マスターハンド！」

「自分の原点に戻りポケモンバトル・・・、大変結構なことじゃないか！」

「マスターハンド様も賛成ですか！」

ゼルダがそう言ったあと、マスターハンドが何か取り出した。

「マルス。ポケモントレーナーになるのならこれを持っていくといい」

彼の手の上に置かれていたものはヘッドフォンのようなものにマイクがついた機械だった。

「これは・・・？」

「私の知り合いに作らせたインカムだよ。

これさえあればポケモンと人間語でコミュニケーションが取れる」

『ほう……』

「す……すごいですよ！というか何で今までこれを出さなかったんですか！」

「戦闘に言葉は必要ないと思ってな」

（……本当にバトルのことしかアタマにないのか……）

<インカム>を法廷記録に入れた。

インカムをアタマにつけた。

「これでいいのかな」

「話してみてくださいー！」

ゼルダが目を輝かせて急かす。

「えー、ピカチュウ？僕の言ってることが分かる？」

『・・・ああ。分かるぜ』

「おお！喋った！」

『・・・さっきから話しているだろう』

ミュウツーにツッコまれる。

「それじゃ、早速聞きたいことがあるんだけど・・・」

『何？』

「何でピカチュウは僕を選んだの？」

彼が僕を選んだ理由、それは大きな期待を寄せているからに違いな
いとゼルダは言ったが・・・

『一番人間ぽくて、扱いやすそうだったから』

「え？」

.....

「まあ、妥当な理由だな」

「フォローしないで下さい!」

ピカチュウが続ける。

『あー、まず言っとくけど。トレーナーって言っても、俺が頼んだのはトレーナーの”役”だからな。お前シロートなんだし、あまり俺のやることに口出しすんなよ』

「.....」

『何だよ。文句あんのか?』

(こいつ.....トガツてやがる!)

「どうですか、マルス?」

ゼルダはインカムをつけていないのでピカチュウの言っていることはもちろん分からない。

「.....どうやら思ったより難しそうだよ」

「え?」

~
~
~
~
~

プロローグ（後書き）

ちよつと長いプロローグですみません・・・。
もっとキャラに会話をさせたかったけど、ggaggdになるのを恐れ
てやめました。
登場人物はまだまだ増えます・・・

プロローグ2（前書き）

逆転裁判にプロローグは欠かせませんが、何章にか分けないと長くなりすぎてしまうのが玉にキズ……！

いや、自分の文章がg d g dすぎるだけなのか……？

法廷記録：

<弁護士バッチ>……僕を弁護士として身分証明してくれるもの。多分この世界にひとつしかない。

<インカム>……マスターハンドから渡された、ポケモンと会話が出来るようになる便利な機械。

人物ファイル：

<ゼルダ>……ハイラルの王女。現在は僕の助手として勤めている。

<マスターハンド>……「この世界」の創始者で、「スマッシュブラザーズ」を創ったアヤシイ右手。僕を弁護士に仕立て上げた。

<ピカチュウ>……放電するねずみポケモン。可愛い外見とは裏腹にトガッている。戦闘経験は豊富。

プロローグ2

- 12月31日 午後1時15分 -
- ポケモンスタジアム 選手控え室 -

スマブラの本部から出て3日が経ち、僕たちは見事に第1回戦を突破した。

とは言っても全てピカチュウの活躍だったが・・・。

『一回戦は余裕だったっていうのに、何でお前はそんなボロボロなんだよ!』

「君のでんきショックにやられたんだ!!覚えてないのか!」

『別にいいじゃねえか!ちょっとしたシツケのムチってやつ?』

(僕はサルまわしのサルかよ・・・!)

僕とピカチュウの相性は最悪だった。

『ちよつとピカチュウ!』

可愛らしい声が口喧嘩に割り込む。

『なんだよプリン』

『マルスはあなたのワガママで私たちのトレーナーをやっているんだから、もう少し丁寧に扱いなさいよ!』

「・・・うれしいけど、何かひっかかる言い方だな」

『トレーナーがノックアウトされて不戦敗になるなんて冗談じゃないわよ・・・。そうですね、カービィさま』

「ペポ!」

(やれやれ・・・このメンツじゃ後が思いやられる)

そうアタマを痛めている間、ゼルダが控え室に入ってくる。

「マルス! 皆さん! 1回戦突破おめでとございます!」

『『『『ゼルダ(ちゃん)(ペポポ)!』』』』

ピカチュウ、プリン、カービィが一斉にゼルダの下へ行く。

「先ほどの試合はとても素晴らしかったですよ、ピカチュウ」

『っ・・・! べ、別に大したことじゃねーよ』

彼女は笑顔でピカチュウの頭を撫でる。

「プリンもカービィもこれからの試合もがんばってくださいね」
『もちろん!』

「ペポ!」

(・・・彼女がトレーナーをやれば良かったんじゃない・・・)

「あっ!忘れていました!」

彼女が思い出したように僕に顔を向ける。

「頼まれたとおり貰ってきました。パンフレット」

「ああ、ありがとう」

彼女から今回のポケモンリーグについてのパンフレットを受け取る。

「え〜と・・・。」

あっ!あつたあつた」

僕は”ルール説明”のページを開く。

<カントー地方限定ポケモンリーグ>
<ルール説明>

? ポケモンの所持数は3匹に限定。

？ ポケモンがひんし、もしくはトレーナーが棄権や意識不明の場合はそのトレーナーの負けとする。

？ カントー地方に生息しているポケモンのみ使用してよい。

『よかったよな、カントー地方限定の大会で』

『そうよ。色んな地方のポケモンが集まっちゃうと私たちもついていけないわ』

「・・・今、心配する点はそこじゃないと思うんだけど。君たち」

『『あー・・・』』

「プー・・・」

『一緒にため息つくな！お前のことだよ、オ・マ・エ！』

『もー。この3番目のルールがなければ、カービィさまの活躍が見られるのに！』

「カントー地方に生息してなければいけないなんて・・・」

「いやいやいやいや！

カービィはそもそもポケモンですらないから！」

僕はすかさずツッコむ。

そう。1番目のルールに記されているとおり、手持ちのポケモンは3匹に限られている。1匹2匹じゃなくて、3匹。

本部でピカチュウが参加するのは確定していた。

ミュウツーを連れて行こうとしたが、あまり興味がないと言われて断念。

そのあと、残ったポケモンのプリンとピチューをスカウト。

しかしピチューはカントー出身ではなく、プリンもやる気がなかった。

だがそこでカービィが乱入。

僕とピカチュウが遠足にでも行くのと思ったのか、どうしても一緒に行きたいという様子だった。

散々せがまれて、僕は連れて行くことを決めてしまい・・・

それに反応するかのようにプリンが

『カービィさまも行くのなら、私も行く!!』

・・・となり

このトラブルメーカー3匹の世話は僕一人じゃ無理ということ、ゼルダが同行することになった。

こうして僕の手持ちはピカチュウ、プリン、そして数合わせということでカービィと決定した。

(・・・出来るだけカービィの出番が回ってこないよう頑張らないとな)

<ポケモンリーグのパンフレット>を法廷記録に入れた。

「ところで、次の対戦相手はどなたですか？」

「えっ、ちょっと待って。え〜と・・・」

僕はトーナメント表に指をなぞる。

「あつた！」

「・・・りかけいのおとこ？名前はまさよし」

『こりやまたパツとしない相手ね』

『2回戦も圧勝だな』

「コラコラ！油断していると足をすくわれるぞ！」

そういつた瞬間、控え室のドアからノックが聞こえた。

「！ はい！どなたですか！」

僕はかけ足でドアに向かって、開ける。

「ヨウ。お前がマルスって奴か？」

そこにはガタイの良い、金髪の大男が立っていた。

「・・・あのー、どちら様で？」

「！ま・・・マチス！」

「！（ピカチュウ・・・、知り合いなのか？）

「オー、マイバッド！失礼、失礼！
まずを俺をイントロデュースしないとな」

大男は威勢良く親指を自分に突き立てる。

「俺はあ、マチスってんだ。
ナイスチューミーチュー！」

「こ……こちらこそ！
な、ないすとみんちゆうです……」

『誰？あの濃ゆいアメリカン……』

『クチバのジムリーダー、マチス。元アメリカ空軍で、でんきポケ
モンのエキスパートだ』

後ろでピカチュウとプリンがひっそり話している間、マチスは続け
る。

「いやあー！！それより、さっきの試合はスタニングだったぜ！」

「あ、それはどうも……」

マチスは部屋の中央にいるピカチュウに視線を向ける。

「こいつがさっきのピカチュウだろ？」

「凄い実戦経験を積んでやがるな……。並のバトルじゃ見れない
動きをしてたぞ」

（ポケモン以外に、剣士や宇宙人も戦っているからな……）

彼は何か思いついたように言う。

「そうだな……。同じでんきポケモン同士、挨拶するのはどうだ？」

そういうと彼はモンスターボール取り出し、床に放る。

「！」

ボールからオレンジ色のポケモンが出る。容姿は……。ピカチュウと非常に似ている。

「俺のエースでパートナー、ライチュウだ」

「ライライ！」

「まあ！かわいい！」

ゼルダがすばやく反応する。

「こいつの凄さはルックスだけじゃねえぞ、シスター」

(ルックス・・・)

マチスとライチュウが共に手を振り上げ、戦隊物のようなポーズを決める。

「俺たちと他の手持ちは空軍時代から一心同体!!」

でんきポケモンとのユニットで俺たちよりストロングァーでタイトな奴あいねえ!!」

・・・

パチパチパチパチ

とりあえず拍手する僕たち。

「おいおいおい・・・。何だあ？

お前もトレーナーならここで突っかかってくるか、クールにスルーするところだろう！」

少なくとも、俺が戦って敗れた二人のバーサーカーはそうしたぜ
「！」

(バーサーカー・・・。っていうかスルーして欲しかったのか)

彼は僕を撫で回すようにジロジロ見て、ゼルダにも視線を向ける。

「それより・・・お前、服装がライトすぎるぜ。

これじゃただのハイスクール小僧とガールフレンドにしか見えな
いぜ」

「が・・・ガールフレンドじゃないですよ!」

僕が真っ赤に反論する。

しかし彼の言うとおり、僕の着ているのはこの世界に溶け込むため、
いつもの防具ではない。

今の服はマスターハンドに用意されたYシャツと黒いドレスパンツ
という学生のようなものだ。

それに加えてゼルダはいつものドレスではなく、白いワンピースに
麦わら帽子といった完全に夏休みスタイルの女の子。

マチスはポケットから何か取り出し、僕に渡す。

「お前もでんきポケモンと一緒にファイトするなら、これぐらいは
持つとけ」

渡されたのは指なしグローブのようなものだった。

「これは・・・？」

「<絶縁グローブ>だ。ゴム製で出来ていて、どんなでんきショックも耐えられるぞ」

(こ・・・これはありがたいものをいただいた・・・)

<絶縁グローブ>を法廷記録に入れた。

そのとき、僕のインカム越しでライチュウが口を開く。

『！？ 少佐！』

あのピカチュウ・・・昔どこかで見たとないかしら』

「・・・やっぱお前もあのピカチュウが気になるか、ライチュウ」

(言葉が通じなくても会話している・・・。これがプロのトレーナーか)

僕に視線を戻すマチス。

「へい、ボーイ。あのピカチュウだが・・・前の持ち主とかいなか・・・」

「おい！ 静かにしてくれないか!?!」

マチスの質問が怒声によって遮られる。

「まったく、折角久しぶりのリーグ戦なのにロクに落ち着けない・・・ってやはり貴様か!! マチス!!」

今度は上半身裸の男が部屋に入ってくる。

「オー！お前も参加しているのか、タケシ！こりゃ、さらにエキサイティングになってきたぜ!!」

「エキストラだかエクスタシーだか知らんが、控え室のドアを開けたまま騒がないでくれ！

「まともにイワークたちと精神統一できないだろ！」

マチスのにやけた顔は消え失せ、ライチュウと共に出口へ向かっていく。

「シット・・・！相変わらずハードアスなファッカーだな、お前は」

『英語もロクに話せないカタブツのくせに少佐に難癖つけるんじゃないわよ！』

（英語は関係ないだろ・・・）

部屋を出る直前、マチスは思い出したように僕の方へ向く。

「オー、イエス！大事なことを言い忘れてたぜ！」

「？ 何でしょうか」

彼の顔にニヤケが戻る。

「ユーの次の対戦相手は確かマーサーだろ？」

あいつは一応、俺の弟子でな・・・。

なかなか手強いからルックフォワードしとくだな！H A H A H
A H A！」

そう言い残して、彼とライチュウは去った。

(マーサー……りかけいのおとこ、まさよしの事か?)

『面白え……。この際、思い切りぶつとばしてやるっじゃねえか
!』

ピカチュウがアドレナリンの影響か、頬から電気が少し漏れ出す。

(でんきタイプの方はみんな物騒だなあ……)

「やれやれ。やっと行ったか」

タケシという男がため息をつく。

「お前も大変だな。あんな奴に絡まれて」

「ははは。そんな対したことじゃないですよ」(本当に……)

彼は右手を僕に差し出す。

「俺はタケシ。ニビのジムリーダーで、いわポケモンのエキスパー
トだ」

「あ、よろしくお願いします。マルスです」

僕たちは握手を交わすと、彼もピカチュウへ視線を向ける。

「……やはり気になるな」

「え？」

「いや、何でもない。次の試合、がんばれよ」

そういつて彼も部屋から去った。

「先ほどから人気ですね、ピカチュウ！」

『そりゃ、昔は良く主人と暴れたからな……』

「主人……？」

君……元は誰かのポケモンだったのか？」

『……まあな』

(？……何か事情がありそうな雰囲気だな)

そのとき、控え室のアナウンスが作動する。

<出場者の皆様！ まもなく第2回戦が始まります！>

<控え室にいる方は全員、スタジアムのほうへ向かってください！>

「！ 時間か・・・」

「がんばって下さいね！マルス！皆さん！」

『おう！』

『今度は大活躍するわよ！』

「へポ！...」

（君は出来れば出てこないでくれ・・・）

〜
〜
〜

プロローグ2（後書き）

プロローグ3に続きます。

やっぱりジムリーダーは初代が一番いいですね
・・・と金銀までしかやってない自分が言ってみたり。

プロローグ3（前書き）

10月になって冷えてきましたね。
コタツに入ってGBポケットでポケモンやってたところが懐かしい・
。

法廷記録：

<弁護士バッチ>・・・僕を弁護士として身分証明してくれるもの。
多分この世界にひとつしかない。

<インカム>・・・マスターハンドから渡された、ポケモンと会話
が出来るようになる便利な機械。

<ポケモンリーグのパンフレット>・・・名前のとおり、今回のカ
ントー地方限定ポケモンリーグのガイドパンフレット。選手の名前
が確認できるトーナメント表や、ルール説明など記されている。

<絶縁グローブ>・・・マチスからもらったゴム製の指なしグロー
ブ。でんきポケモン使いの必需品らしい。

人物ファイル：

<ゼルダ>・・・ハイラルの王女。現在は僕の助手として勤めてい

る。

<マスターハンド>・・・「この世界」の創始者で、「スマッシュブラザーズ」を創ったアヤシイ右手。僕を弁護士に仕立て上げた。

<ピカチュウ（ ）>・・・放電するねずみポケモン。可愛らしい外見とは裏腹にトガッている。戦闘経験は豊富。

<プリン（ ）>・・・おてんぱふうせんポケモン。戦闘能力はあまり高くないが活発で、行動力がある。カービィに憧れ、ホの字。

<カービィ>・・・ピンクの丸い生命体。「すいこみ」で相手の能力を奪う「コピー能力」をもつ、スマブラの悪魔。ポケモンですらないのにポケモンリーグに付いてきた。

<マチス>・・・イナズマアメリカン。クチバのジムリーダーで英語まじりの言葉を喋る。元軍人でりかけいのおとこ、まさよしの師匠。

<ライチュウ（ ）>・・・ピカチュウの進化系でマチスと他の手持ちとは空軍時代からの仲間。マチスを崇拜している。

<タケシ>・・・かたいいしを持つ男。スティックないわポケモンのエキスパート。マチスと衝突する。

プロローグ3

- 12月31日 午後2時45分 -
- ポケモンスタジアム 会場 -

< さあ、お待たせしました! >

< 第2回戦 第2試合を始めたいと思います >

す!!!!!! >

< 青コーナーには第1回戦で華麗な勝利見せてくれた
異国の蒼い貴公子、マルスク >

ん!!!!!! >

ワアアアア

!!!!!!

キャ

!!!!!!

『黄色と茶色の声援が混じっているわね』

『いやな色の組み合わせだぜ・・・』

(君が言えたことじゃないだろう・・・)

<そして赤コーナーにはあのマチスに弟子入りして早1年3ヶ月！>
<Aボーイりかけいのおとこ、まさよ　　し！！！！>

「ど、ど、も」

赤コーナーで低姿勢に挨拶をする青年が見える。

見た目はボサボサの髪、メガネ、長ズボンとYシャツインという
まさに”りかけい”な男であった。

『りか”より”リカちゃん”がお似合いなおトコね』

『しかも指なしグローブをつけてるときた。こりゃ見てられないな』

「あれも絶縁グローブだから！　いちいち余計な茶々を入れないで
くれ！」

「こ、こ、こ、こんな見苦しい者ですが、ヨロシクお願いしましゅ・・・
！ドゥフｗｗｗｗ」

りかけいのおとこが舌を噛みつつ僕に挨拶する。

「そこまで自分を下げなくても……」
「ちんちんそヨロシク……」

<それでは第2回戦 第2試合……>

<レディー……GO!!!>

始まりの合図と同時にピカチュウが飛び出す。

『ヨッシャ！ また圧勝だぜ！』

「お、おい！！まだ指示を出して……！」

……

試合開始から数分経過。

僕の戦況は・・・最悪だった。

『ハア・・・！ハア・・・！』

今リングに出ているのはピカチュウだが、
もうひんし寸前である。

りかけいのおとこの手持ちは残り2匹。
1匹目のマルマインは大爆発を起こし、途中で交代したプリンがや
られてしまった。

そしてこの2匹目のエレブーが・・・中々手強い。

さらに、りかけいのおとこは・・・

「ドユフフフｗｗｗｗ 別に手加減をされる必要はないのですよ
？ｗｗｗｗ オウフｗｗｗｗウボオアｗｗｗｗ」

調子に乗らせるとウザイタイプときた。

『クソツ・・・！何であんなカスに・・・！』

ピンチの状況に思わず暴言を吐き捨てるピカチュウ。

「お、落ち着けピカチュウ！冷静になればきつと・・・」

『ウルツセエ！！！！ □出しすんなあ！！』

バリバリバリバリッ！！！！

「アバババババツババババ b b b b b！！！！？？」

<おーっと！マルスくんにもまたでんきショックが直撃い！！>

<・・・そしてその隙にエレブーがかみなりパンチを繰り出して
きた
！！！！>

『「あっ」』

きゆうしよにあたった！

ピカチュウはたおれた！

<さあ　　！！マルスくんはとうとう最後の3匹目！>

<この最悪の状況を彼は逆転できるのかあ！！？>

そんなの無理に決まっている。

「あ……悪夢だ……」

「ドゥフフフｗｗｗｗ」

ところがどっこいｗｗｗｗ夢じゃありませんｗｗｗｗ

現実ですｗｗｗｗ！これが現実ｗｗｗｗ！「

僕の残った手持ちは他にでもない、あのカービィだ。

ここで戦わせればエレブーと3匹目に勝てることはきつと違くない

が……。

(やっぱり反則だよなあ……ポケモンじゃないし……)

となると、僕に残った選択肢はただ一つ。

僕はこの試合から棄権しようとして手を挙げた

その時！

「へ。ポ。」

リングの中、僕の目の前にピンクの悪魔が舞い降りた。

(か……カカカカカカカカ ビイ !!!???
?? いつの間に出てきたんだ!!!!??)

しかもカービィは何故かやる気マンマンである。

(どつやら迷っている暇はないらしいな・・・)

僕は挙げかけていた手を再び突き上げて言い放った。

「き・・・棄権します！」

.....

会場は重い沈黙に包まれた。

しかしそれは当然のこと。

訳の分からない生き物が出した思えば、すぐに棄権をしてしまったのだから。

<え・・・え>と・・・>

<ル、ルール説明に記されているとおりトレーナーが試合を棄権した場合は無条件でその選手の敗退ということになりますので・・・>

・ゴホン>

アナウンサーが咳払いをしつつ叫ぶ。

<勝者、まさよお

し!!!!!!!!>

<蒼い貴公子マルスくんを見事に勝利し、第2回戦を突破あ!!!!!!
!>

.....

わ.....わあ

もちろん観客は突然の展開についていけず、声援もお通夜状態であった。

「ホッ.....」

めポケモンセンターという場所へ向かった。

待つこと1時間半、2匹の小さい仲間は全快。

そしてピカチュウと病室でふたりきりにしてもらった今、目覚めた彼のシビれる10万ボルトを受けているところだ。

『なん で あのピンク玉に戦わせなかつたんだよ!! 少なくともあのクソ野郎をケチヨンケチヨンに出来ただろーが!!』

「な・・・なんだよそれ! 僕は大事になるまえに平和に解決しよう
と・・・」

『何が平和にだよ!! ったくこんな形で・・・しかも2回戦敗退
なんて・・・』

レッドに何て言えばいいんだよ!! ！！!!

(?!?...レッド...?)

そう思っている内にピカチュウは部屋を窓から飛び出してしまった。

「あ……！ピカチュウ！」

……

「はあ……」

僕は一人になって、床にしりもちをついた。

(やっぱり無理があったか……僕がトレーナー代理なんて)

病室のドアがゆっくり開く。

「マルス……大丈夫ですか？」

ゼルダが心配そうに顔を出す。

「あまりいいとは言えないよ……ははは」

空気を少しでも和らげるために僕は苦笑する。

『それにしてもピカチュウ、ちょっとやりすぎだと思っわー！わざわざポケモンセンターにまで運んできてくれたのに』

「ペポ……」

カービィは流石に罪悪感を感じたのか、少し悲しい様子だ。

僕は少し笑い、彼の頭を撫でる。

「いや……君は悪くないよ、カービィ。

リングに突然出てきたのは、きっとピカチュウとプリン
の仇討ちのためだったんだね」

「……ペポ！」

僕の言葉が伝わったのか分からないが、彼は笑顔を取り戻した。

『カービィさまが私のために、ルールを犯してまで戦おうとしたなんて……惚れ直しました!』

「ペポ」

(単純なやつら……)

「とにかく……ピカチュウを探しに行きましょうか」

ゼルダがこの場の雰囲気直ったことを察し提案した。

「そうだね。行こうか、みんな」

僕はしびれた足をなんとか起こしゼルダ、カービィ、そしてプリン

と共に病室を出た。

- 12月31日 午後5時40分 -
- ポケモンスタジアム ゲート2 -

「あまりここには戻りたくなかったんだけどなあ・・・」

『仕方ないじゃない。ピカチュウが行きそうな場所なんてここしか知らないんだから』

「皆さん、さっそく手分けして探しましょう！」

見つけても見つからずとも、午後6時にここに集合でこといいですか？」

「よし、そうしようか。・・・あっ、ちょっと待った」

僕はみんながバラバラになる前に、呼び止めた。

「？」

「カービィ、君はさっきの試合で目を付けられてるかもしれない。行く前にプリンをすいこみで「ピー」して、姿を変えておいたほうがいい」

「なるほど！いい提案です！」

『そうね！』

それじゃ早速。失礼します、カービイさま。』

プリンが自らカービイの口に入るうとする。

(余り見れない光景だな・・・)

僕はみんなと別れたあと、ひとまず控え室が並ぶ廊下に出た。

(ここには居ないな・・・)

そう思い立ち去ろうとしたとき、一つのドアが開いた。

「おっ？たしか・・・マルスだよな」

そこにいたのは第2回戦の前に顔を合わせた、上半身裸の男であった。

「タケシさん！」

「おお、覚えていたか！残念だったな、第2回戦！」

「ヴッ・・・！」(いきなり痛いところを・・・)

僕は2回戦の話題になる前に、僕は伺った。

「ところでタケシさん！僕のピカチュウをどこかで見かけませんでしたか？」

「ピカチュウ？いや、見たような見てないような・・・」

（どっちだよ！）

「はーん。その様子じゃケンカ別れしたというところか？」

「さっきから痛いところを突いてきますね・・・」

僕は思わず口にしてしまう。

「何、あまり心配することじゃない。ポケモンはトレーナーの手持ちである限り、どんな遠くにいつても必ず主人の元へ戻っていく習性がある。お前も待っていれば、向こうから戻ってくるさ」

「そ・・・そうですか」（僕は主人じゃないけど・・・）

「しかし、でんきポケモンというのは本当に軟弱だな！」

「え？」

タケシさんの突然の発言に僕は思わず聞き返す。

「知っているか？でんきポケモンは性格が短気なやつが多くてな・・・」

。

しかも少し残虐性があるとも聞くし、代表的な物理攻撃はかみなりパンチとかみなりのキバだけだ！

そんなせこい性格だから一度折れると面倒くさいことになる！」

「た・・・タケシさん？」

「そんな捻くれた電気が頑丈な岩に敵うはずがない！！
君もそう思わないか！！？」

「は・・・はあ・・・」（この人・・・でんきポケモンに何か恨みでもあるのか？）

「ま・・・マルス　　！！！！！！」

廊下の向こうから突然、僕の名前を叫ぶ声が聞こえる。

僕は振り向くと、ゼルダが駆け足で走ってくるのが見えた。

「！？　どうしたんだ、ゼルダ！？」

「ハア・・・！ハア・・・！ぴ・・・ピカ・・・」

「え・・・？」

「ピカチュウが見つかりました！！・・・..だけど」

「捕まっています!!!!警察の方々に!!!!」

「な……!!?」

「なんだってええええええええええええええええ!!!!?」

「と……とにかく、スタジアムのゲート1の外にいます!!!!
ちです!!!!」

僕たちは全速力で現場へ向かった。

- 12月31日 午後5時55分 -
- ポケモンスタジアム ゲート1 -

『こっちよ!!!早く!!!』

プリンとカービィの姿が見え、僕たちはやっとゲート1についた。

その場で僕が見た光景は、よくテレビドラマで見るワンシーンのようだった。

目に痛いパトカーと救急車のランプ。ざわめく周りのギャラリィ。そして泣き叫ぶ人の声。

「マーサー!!!!!! しっかりしやがれ!!!!!! ゲラップ!!!!!!
!!!!!!
マーサー!!!!!!!!!!!!」

救急車の前にはマチスの姿が見える。

そして彼の近くにはシートに覆われたタンカ。

その布の下にいる者は見えないが・・・マチスの言葉を聞く限り、

あの、りかけいのおとこ まさよし だろう・・・。

そしてパトカーに視線を向ける。

後部座席に乗せられる人影は見えないが・・・警官の足元を見れば、
小動物が拘束されているのが分かる。

黄色い体、とがった耳、そしてイナズマ型のしっぽ。

間違いない・・・。

『ピカチュウ!!!!!!!!!!!!!!』

「ペポポ!!!!!!!!!!」

こうして幕が突然開かれた

僕とゼルダの初めての事件が・・・

〜
〜
〜

プロローグ3（後書き）

やっとプロローグが終わりました・・・。

すでに作り上げられたキャラクターたちと世界感を立てるためとはいえ、少し長すぎましたね・・・^^；

ちなみにタケシの解説するでんきポケモンはほとんど作者の偏見です。

不快に思ってしまった人には深くお詫びします。

次回からはついに探偵パートです！

1日目・探偵パート前編（前書き）

逆転裁判1のエンディングBGM（DS4話ED）って何か、ものすごく甘酸っぱいですよね。思わず胸が苦しくなります。

前の投稿から1ヶ月以上も経っていたなんて・・・どんだけ遅筆なの俺。

法廷記録：

<弁護士バッチ>・・・僕を弁護士として身分証明してくれるもの。多分この世界にひとつしかない。

<インカム>・・・マスターハンドから渡された、ポケモンと会話ができるようになる便利な機械。

<ポケモンリーグのパンフレット>・・・名前のとおり、今回のカントー地方限定ポケモンリーグのガイドパンフレット。選手の名前が確認できるトーナメント表や、ルール説明など記されている。

<絶縁グローブ>・・・マチスからもらったゴム製の指なしグローブ。でんきポケモン使いの必需品らしい。

人物ファイル：

<ゼルダ>・・・ハイラルの王女。現在は僕の助手として勤めている。

<マスターハンド>・・・「この世界」の創始者で、「スマッシュブラザーズ」を創ったアヤシイ右手。僕を弁護士に仕立て上げた。

<ピカチュウ（ ）>・・・放電するねずみポケモン。可愛い外見とは裏腹にトガツている。戦闘経験は豊富。

<プリン（ ）>・・・おてんばふうせんポケモン。戦闘能力はあまり高くないが活発で、行動力がある。カービィに憧れ、ホの字。

<カービィ>・・・ピンクの丸い生命体。「すいこみ」で相手の能力を奪う「コピー能力」をもつ、スマブラの悪魔。ポケモンではないのにポケモンリーグに付いてきた。

<マチス>・・・イナズマアメリカン。クチバのジムリーダーで英語まじりの言葉を喋る。元軍人でりかけいのおとこ、まさよしの師匠。

<ライチュウ（ ）>・・・ピカチュウの進化系でマチスと他の手持ちとは空軍時代からの仲間。マチスを崇拜している。

<タケシ>・・・かたいいしを持つ男。スティックないわポケモンのエキスパート。マチスと衝突する。

<まさよし>・・・通称、りかけいのおとこ。弱腰な男であったが、調子に乗らせるとやっかい。マチスの弟子であり、今回の被害者。

1日目・探偵パート前編

- 12月31日 午後6時10分 -
- ポケモンスタジアム ゲート1 -

ピカチュウが補導され、まさよしが救急車で運び出される間

僕たちは傍観、

ただ突っ立っているだけであつた……。

15分という恐ろしく長い時間が経ち、ギャラリーも徐々に減っていった。

その時、ゼルダが口を開く。

「ピカチュウ……そして……りかけいのお人……」

僕の頭の中にも同じ名前が浮かび、

そしてこの後の展開も段々ハッキリと見えてきた。

?

しばらくしている内に、駐車場からパトカーで捜査官の増員が到着するのを見かける。

「！あの捜査官たちについていけば、現場が見られるかもしれない！」

『え？でも部外者以外は立ち入り禁止なんじゃ・・・』

「そんなことで迷っている場合じゃないだろ！早く行こう！」

僕たちはスタジアム内へ再び足を運ぶ。

- 12月31日 午後6時15分 -
- ポケモンスタジアム ゴミ捨て場 -

捜査官たちの後ろをコソコソついていった先にたどり着いたのは、ゲート1の丁度反対側にあるゴミ捨て場であった。他の警官たちが一点に群がっている場の周りは粗大ゴミ以外なものもない。

「スタジアムの真横に粗大ゴミの山なんて不衛生だな・・・」

「と・・・特徴的な匂いがする場所ですね・・・」

ゼルダが鼻をつまみながら言う。

（素直に”くさい”と言えよ・・・）

『あれ？誰かこっちに走ってくるわよ』

プリンが指摘するとおり、捜査官の溜まり場から白衣を着た一人の老人が走ってくる。

「クオリヤアアー！！！」

ここは・・・ゼエ・・・関係者以外・・・ゴホツ・・・！！立ち・・・入り禁止・・・ヒイ・・・じゃ・・・！！！」

（息が上がるなら走らなければよかったのに・・・）

老人は息を整えた後、僕に怒りの視線を向ける。

「とにかく・・・！！この現場はわしの指揮で捜査しておる！」

部外者は早く立ち去るのじゃ！」

「あなたの指揮・・・？その格好を見たところ科学捜査官なのでは？」

「なに？君、ポケモントレーナーのくせにわしの顔をしらんのか？」

『あっ・・・このおじいさん、もしかして・・・』

「ふっふっふっ……。そのプリンはわしの正体に気づいたようじゃな」

老人が咳払いをする。

「ゴホン！ わしはこのカントー地方を始め、あらゆる場でポケットモンスターを研究している博士……オーキド・ユキナリじゃ！ 君もトレーナーならそれくらい覚えておくこと！」

「は……はあ……」（自分のことを威張られてもな……）

僕はふと気づく。

「あれ？ でも何でポケモン研究者のあなたが現場の指揮を……」

「あー、それはいい質問じゃ。」

「……あまり面白くない理由じゃだがな……」

（面白くない理由……？）

オーキド博士は後ろの捜査官たちに目を向ける。

「君はもう知ってるかどうか分からないが、ここであったのはポケモンによる 殺人事件 じゃ」

「!?!」(やっぱり!あのりかけいのおとこは・・・)

彼は後ろ頭をかきながら、ため息をつく。

「いや、ポケモンが人間を襲うことは珍しいことではないのじゃがな・・・。

こういった、人の命を奪うまでのことはせんはず・・・。
・・・ポケモン博士として、少しショックじゃわい」

僕の脳裏にピカチュウにでんきショックを受けた記憶が蘇る。

(まあ・・・殺す勢いではなかったよな・・・多分)

「そこでわしはこの事件にポケモン専門家として、捜査のリードを協力しているわけじゃ・・・が」

怒りをあらわにするように、オーキド博士は地団駄を踏む。

「セツカクの年末だというのに・・・!

頭打ちの研究から体と脳を休め、家で孫たちと暖かいダンランを送る予定が

この事件のおかげで全部ペアじゃ!!

しかもこのご老体を、この寒さに放り出すとはなにごと!!
死人につるのムチじゃい!!!!

(老体というわりには、ハキハキ動いているような・・・)

彼は気持ちを落ち着かせたあと、思い出したように言った。

「そうじゃ、忘れとった!!君たちは部外者じゃろ!!

さっさと彼女とプリンたちをつれて、この場から離れんか!!」

「えっ!でも、私たちはピカチュウの・・・」

僕はすかさずゼルダの口を指で押さえて、彼女の耳元に囁く。

(ゼルダ!ここでピカチュウが手持ちとバラすのはよした方がいい。
この人も僕たちを部外者呼ばわりするのは、それを知らない証拠
・・・)

ここで言っ飛ばせば主人として取調べをさせられて、捜査が
来なくなる!)

(そ・・・そうですね・・・。ごめんなさい・・・)

彼女が顔を少し赤くして理解したあと、僕はそつと指を離して博士
に顔を向きなおす。

「どうした？何か言いかけたようじゃが・・・」

「いや、気にしないでください。僕の連れ、ちょっとアレでして・・・」

「何ですか！？アレって！」

とにかく僕たちは現場の捜査権がないと理解し、ひとまず場所を移すことにした。

- 12月31日 午後6時30分 -
- ポケモンスタジアム 選手控え室 -

「ここは試合の間、僕たちが居た控え室だな」

『わざわざここに戻る必要なんてないんじゃない？』

「ペポ〜」

「いや・・・現場も捜査できないし、ピカチュウと面会できるまできつとまだ時間あるし、他に行く場所の心当たりなんてあまりないから・・・」

『何よ！！あなたに考えがあると思ってついでにいったのに、ノーブ

ランだったの!?!」

バキッ!

「グハア!?!?」

プリンの神速の左が僕の右頬をエグる。

(な、何て重いビンタだ……)

「しかし……盲点になる意外なところで重要な証拠を発見するのは推理モノのお約束ですよね」

ゼルダが優しいフォローとともに、膝につきロッカーの下などに目を通し始める。

「コラコラ! そんな体勢をとったら、セツカクのワンピースが汚れ・
・」

ガチャッ

僕がゼルダのスカートを汚れないよう引っ張り上げたとき、控え室のドアが開く。

「・・・ウオウ!？」

「!!マチスさん!!！」

この部屋に入ってきたのは先ほど、被害者の横で叫んでいたマチスさんであった。

「どうかしたんですか？」

「い、いやいやいや!何かこの部屋からワイアードなノイズが聞こえてきたから、何なのかファインドアウトしにきたただけなんだぜ！」

(何をテンバってるんだ、この人)

「いや、セツカクのセッションをディスタープしたようだ・・・
ソーリー!!」

マチスはそう言い捨て、部屋から立ち去った。

「セッション・・・？」

その言葉の意味を考えているとき、僕は今のゼルダとの現状を理解した。

「ちょ……!!」

マチスさん!!!ストップ!

違います!!!誤解です……!!!!」

僕が顔を真っ赤にしながら、部屋の外の廊下へ駆け出す。

しかし、もうマチスの姿は見えなかった。

(……恐ろしい素早さで立ち去ったな……)

「あら……?これは何でしょう?」

ゼルダはあるロッカーの下に何か見つけたようだ。

「?何かあったのかい?」

僕は控え室に戻り、ゼルダの場へ向かう。

「何なのかハッキリ分かりませんが……そうだ!」

彼女はカービィに話しかける。

「カービィ！あなたのすいこみであの小さいものを引き寄せてくれますか？」

「ペポ！」

カービィは返事をする、ロッカーの下の隙間から掃除機のように吸い始める。

（ほこりでムせないのか・・・こいつは）

ある程度すいこみをしたあと、ロッカー下の”何か”が顔をだしゼルダはそれをカービィの胃袋に収まる前に受け止める。

「これは・・・！」

ポケモン・・・ボールでしたっけ？」

彼女が手にしていたものは赤白の丸い球体であった。

「それはモンスターボールだね。マチスや、他のトレーナーたちがポケモンを保管するのに持ち歩いていた気がする」

僕はそれを受け取ると、ちょっとした”重さ”があるのを見逃さなかった。

「？中に何か入っているのか・・・？」

中身こそ見えないが、” なにか ” が入っているのは間違いない。

『 ためしに出してみたら？ 』

「駄目だよ、他人が忘れたボールかもしれないし。

勝手に人のものをあけるのは失礼だろ」

< モンスターボール > をポケットの中に入れた。

(このボールは捜査のあとでポケモンセンターに預けよう)

僕たちは部屋の隅々まで調べたが、特に証拠になるようなものは見つからなかった。

「この部屋の捜査はこんなところか・・・」

「ペポ！」

カービィが何か感じ取ったかのような素振りを見せる。

「?どうしたのでしょうか、カービィ」

ゼルダが聞いた次の瞬間、彼はこの控え室から走り出た。

『!!カービィさま、一体どこへ!?!』

「何か気づいたのかもしれない!
追ってみよう!!!」

僕たちはカービィに続いて部屋を出た。

- 12月31日 午後6時50分 -

- ポケモンスタジアム トレーニングルーム -

「運動部屋もあつたのですか・・・このスタジアム」

カービィは部屋の隅にあるカバンへ駆け寄った。

(まさか・・・)

むしゃーむしゃーむしゃーむしゃーむしゃー!!!

ピンクの悪魔はカバンの中に潜んでいた缶詰を嗅ぎ出し、それを口の中へ次々と入れていった。

「こ……コラコラコラ！！！！！！！！！！」

他人の食料を勝手に食うんじゃない！！！！！！！！！！」

僕はゼルダの協力で何とかカービィをカバンから引き剥がした。

「やれやれ……一体どうすんだよこれ」

彼の残した跡地は悲惨であった。

僕はその場にあつた缶詰を拾った。

「ポケモンフード……ポケモンにやる餌だろうか？」

……ん？」

缶詰と中身のフードが散らばっているなか、僕はノートのようなものを見つける。

『何よ、その薄汚い本は』

「薄汚いっていうな。どれどれ……」

ピカチュウ完全攻略法・・・？」（なんじゃこりゃ・・・）

僕は思わず開いて読み始めた。

（ピカチュウのデータがこんなビツシリ・・・
覚えられる技や特殊能力までほとんど網羅しているみたいだ）

ページをめくり続けるうち、最後のページにたどり着く。

そこにはデカイ文字で魂の叫びが書かれていた。

「打倒ピカチュウ！！」

今日はダブルヘッダーだ！！！！」

「何ですか、ダブルヘッダーって？」

ゼルダの質問に僕は答える。

「ダブルヘッダーは野球とかのスポーツで1日に2試合続けてやることだよ」

僕は彼女が見れるようにノートを渡す。

「なるほど……。しかしそれが何故ピカチュウと関係が」

タッタッタッタッ

『！廊下から誰か近づいてくるわよ、マルス！』

「えっ！？早く片付けて出て行かないと……！」

そういつて僕たちは未開封に散らばった缶詰を全てバッグに押し込み、反対側の出口から抜け出した。

「あ、危ない……。泥棒かと思われるところだった」

『……』

「?どうしたの、プリン」

『いや……』

案外、そうかもしれないわ』

プリンが僕の隣に指をさす。

僕が横に向くと、そこにはもちろんゼルダがいた。

「マルス……ごめんなさい。

つい、持ってきてしまいました」

さっきのノートを手にとって。

「……………」

僕は彼女から無言にノートを受け取ったあと、
トレーニングルームのドアへ戻る。

『わざわざ返しに行くなんて、律儀ねえ』

「ペポ〜」

「他人のものは大切にする人なんですよ、マルスは」

「他人のもの”も”だ」

部屋に入る前にツツコミを入れたあと、僕はドアの小窓から中をうかがう。

その中には一人の男の姿が見えた。

(あれは……タケシさん?)

ということとは、これは彼のノートか)

ドアノブに手を添えた瞬間、脳裏に一時間前の会話が蘇る。

しかし、でんきポケモンというのは本当に軟弱だな！

そんな捻くれた電気が頑丈な岩に敵うはずがない！！君もそう思わないか！！？

「……………」(確証はないけど…………)

僕はドアノブから手を放す。

「あれ、ノートを返さないのですか？」

「…………いや、面白い手がかりを手に入れたかもしれない。持ってきてくれてありがとう」

「お、お礼なんて…………そんなことは」

彼女は少し赤面する。

（まあ、正確には盗ってきたものだけどね・・・）

<ピカチュウ完全攻略法>を法廷記録に入れた。

僕たちはその場を後にした。

- 12月31日 午後7時10分 -
- ポケモンスタジアム 第2ゲート -

「ところで、ピカチュウとはいつになったら面会できるんだろう・・・」
「？」

『そうねえ・・・ポケモンが殺人容疑で逮捕されることなんて聞い

たことないから、取調べの長さも分からないわね』

(弱ったなあ・・・)

「さつき留置所に送られたピカチュウの取調べはあと20分で終わる予定だ」

後ろから声をかけられる。

「！ 誰だ！！」

振り向く先には1人の青年が立っていた。

トガツた茶髪に鋭い目が特徴の、落ち着いた男であった。

「・・・驚かせてしまったのなら、悪かった。あやまろう」

(誠意のミジンも感じられないな・・・)

「そ・・・それより、本当なのですか!あと、20分でピカチュウと会えるのは!」

「そんなウソをついてどうする。俺のじいさんから聞いた情報だ、間違いない」

「そうですね・・・情報をありがとうございます。

ところで、留置所へ行くにはどこを・・・?」

「留置所はここから少し離れた場所にあるが・・・お前たちのその格好を見る限り、この辺りはあまり詳しくなさそうだな。
道案内をしてもいいぞ」

「そ、それを是非お願いできれば・・・」

謎の青年は僕のセリフを人差し指を立ててサエギる。

「ただし、一つの条件付きだ」

「え……」(じよ、条件……?)

彼はそのまま、指をカービイの方向へ指す。

「そのプリンに擬態した生物を、こちらに貸してもらいたい」

「な……」

『な……!』

「なんだってええ!!?」(カービイのコピーを見抜いた……!?)

「どうした。お前の手持ち……いや、”手持ち”に会いたくないのか……?」

マルス・アリティア」

(……こいつ、何者だ!?)

~
U
U
U
~

1日目・探偵パート前編（後書き）

オーキド博士とイトノコ刑事って、ちょっと似てますよね。

1日目・探偵パート後編（前書き）

この小説は毎回、逆転裁判のサントラを聞きながら書き上げています。

逆転シリーズは本当に名曲ぞろいですよね。

法廷記録：

<弁護士バッチ>・・・僕を弁護士として身分証明してくれるもの。多分この世界にひとつしかない。

<インカム>・・・マスターハンドから渡された、ポケモンと会話が出来るようになる便利な機械。

<ポケモンリーグのパンフレット>・・・名前のとおり、今回のカントー地方限定ポケモンリーグのガイドパンフレット。選手の名前が確認できるトーナメント表や、ルール説明など記されている。

<絶縁グローブ>・・・マチスからもらったゴム製の指なしグローブ。でんきポケモン使いの必需品らしい。

<ピカチュウ完全攻略>・・・タケシのカバンから発見した、ピカチュウのデータが網羅しているノート。最後のページにデカく「打倒ピカチュウ！！今日はダブルヘッダーだ！！」と書かれている。

人物ファイル：

<ゼルダ>・・・ハイラルの王女。現在は僕の助手として勤めている。

<マスターハンド>・・・「この世界」の創始者で、「スマッシュブラザーズ」を創ったアヤシイ右手。僕を弁護士に仕立て上げた。

<ピカチュウ（ ）>・・・放電するねずみポケモン。可愛い外見とは裏腹にトガッている。戦闘経験は豊富。

<プリン（ ）>・・・おてんぱふうせんポケモン。戦闘能力はあまり高くないが活発で、行動力がある。カービィに憧れ、ホの字。

<カービィ>・・・ピンクの丸い生命体。「すいこみ」で相手の能力を奪う「コピー能力」をもつ、スマブラの悪魔。ポケモンではないのにポケモンリーグに付いてきた。

<マチス>・・・イナズマアメリカン。クチバのジムリーダーで英語まじりの言葉を喋る。元軍人でりかけいのおとこ、まさよしの師匠。

<ライチュウ（ ）>・・・ピカチュウの進化系でマチスと他の手持ちとは空軍時代からの仲間。マチスを崇拜している。

<タケシ>・・・かたいいしを持つ男。ストイックないわポケモンのエキスパート。マチスと衝突する。

<まさよし>・・・通称、りかけいのおとこ。弱腰な男であったが、

調子に乗らせるとやっかい。マチスの弟子であり、今回の被害者。

<オーキド・ユキナリ>・・・ポケモンが生息する世界で知らない人はいないポケモン博士、らしい。ポケモン専門家として事件の捜査の指揮をさせられている。

<?????>・・・トガツた茶髪と鋭い目つきの青年。この事件に関わっているようだ・・・？

1日目・探偵パート後編

- 12月31日 午後7時35分 -

- 留置所 面会室 -

この殺風景な面会室に着いて待つこと5分。
分厚いガラスの向こうのドアから黄色い小動物が入ってくる。

『……よくここが分かったな』

ピカチュウが開口一番に言う。

「まあね。道案内をしてくれた人がいたから」

後ろにいるゼルダたちを見渡す。

『……あのピンク玉はどこ行ったんだ？』

「……ちょっとしたボランティア活動に行ったよ」

・・・

この静かな空間に交わされる、感情のこもらない会話。

バシッ

「あてっ
」

プリンに後ろアタマを叩かれ、静かに囁かれる。

(早く本題に入りなさいよ、このウスノロ！)

(うん。うん。ゴメン・・・)

この留置所にたどり着く20分前、

僕たちは案内してくれた青年の要求を呑み、カービイをしばらくの間貸すことにしてしまった。

無事、ピカチュウの元へたどり着けたのはいいが・・・
カービイを渡してしまったことにプリンは大変不機嫌である。

(ややこしいことになったよ、ホントに)

『 ……でっ? 』

ピカチュウが問う。

『 何しに来たんだよ。 』

アンタに散々反抗してきた奴の無様な姿を見に来たってわけか? 』

「 ぴ、ピカチュウ!! その様な言い方は・・・! 」

ゼルダが声を上げるが、僕は手を挙げ彼女を静める。

「・・・ピカチュウ」

本題に入る。

「何故、君は捕まっただい？」

『・・・』

俺があのかけいのクソ野郎を殺したから・・・と言っただら？」

バァァン！！

「ふざけるな！！！！」

ガラスを思い切り叩き、叫ぶ。

向こう側にいる看守に睨まれるが気にしない。

「何で僕を信用しようとしない！！！！」

ポケモンとトレーナー以前に、スマッシュブラザーズの仲間だろ

！！！！！！」

部屋が再び沈黙に包まれる。

『……これは俺自身が考えて、決めてやったことだ。』

仲間なら黙って、俺を見届けてくれよ』

彼はそう言い、ドアの方へ戻り始める。

しかし、

「待った！」

『！』

僕は呼びとめ、ピカチュウも少し目を開きこっちに向きを直す。

「分かった……君が何を思い、何をしたかはこの際置いておこう。

「ただ、ここで君を見届けるような真似をするわけにはいかない！

「僕には君を救う義務がある……！」

『フン……面白くないことじゃねえか。』

「なら見せてみるよ！その義務があるってどういう証拠を！」

「くくらえ……！」

<弁護士バツチ>

『・・・何だよそれ』

「僕が弁護士として、君の無実を証明させてくれるものさ」

僕は続ける。

「君は知っているか分からないけど、マスターハンドはつい最近” 法廷” というものを戦場に加えることに決めたんだ」

『ほづてい・・・？』

「そう。決められた事件の容疑者の裁きを計る場所。

マスターハンドにさえ頼めば明日に裁判を開くことが出来る。

・・・もちろん、君を被告人として」

『・・・それならあいつにお前の望む無罪を決めさせちまえば手っ取り早いんじゃないか？』

「それは無理だと思う。」

あの人、” ふえあー” な戦い以外認めないからね」

「フン。」

あのバトルオタク……」

ピカチュウの顔が皮肉たっぷりにやけたとき、ある作戦を思いつく。

人差し指を彼に突き出す。

「ピカチュウ。君はどうも殺人の罪を認めているように聞こえる……」

でも……もしそうなら、僕はそれに挑戦するまでだ」

『!』

ピカチュウのにやけが消え失せる。

「さっき言ったとおり、後でマスターハンドにこの事件の法廷を明日開廷させるように頼んでくる。

僕が弁護するためには君の承認が必要だが、君は自分の容疑を否定しなくてもいい。

これは君と僕の真剣勝負だ。

この裁判で無罪を勝ち取れたら僕の勝ち、有罪なら君の主張するとおりになるから君の勝利。

……この勝負、受ける気はあるかい？」

「ま、マルス……」

後ろからゼルダの心配する声が聞こえるが、今は気にしていられない。

答えを聞くまで目を一秒も離さないつもりだ。

『……なるほど。』

俺の負けず嫌いを利用して、弁護を認めさせる気だな？』

「う……」「(何で最後までクールに決めさせてくれないかなあ……)
()

ピカチュウはふてぶてしく笑う。

『でも面白い勝負だ。』

スマブラの先輩としてその挑戦、受けてやる』

「……そう来なくっちゃ」

『でもいいのか？』

『この勝負、圧倒的にお前が不利だぞ』

「いや、勝率はイーブン。五分五分さ。

真実は白黒ハッキリ決めてくれるからね」

そう言い残し、僕たちは面会室から去る。

『……そいつが顔を出してくれたら、だろ』

- 12月31日 午後8時10分 -
- ポケモンスタジアム ゲート1 -

「またここに戻ってきましたね」

「仕方ないよ。まさか1日以上いるとは思わなかったし。
ホテルを取れる場所とか聞かないと」

『まったく、散々な年末ね。
せめてカービィさまと一緒に年を越せればいいんだけど・・・』

・・・・・・・・・・・・・・・・

「?何かこっちに向かって来てる……」

『「え?」』

僕はその何かの方向に目を凝らす。

「……ウツサをすれば……」

「ペポオオオオオオ!!!!!!」

ドゴオ！！

「グハア！！！？？」

悲痛な叫びとともにカービィが腹に飛び込んでくる。

「カービィ！一体どうしたのですか！？」

「ニユ〜・・・」

僕が激痛で腹を抱えている間

丸い玉は涙目でゼルダの元へ向かって抱きつく。

(僕にタツクルをかました意味は……)

『カービイさま……何か酷い目にあっただんですか!?!』

「ペポ」……

(あの男……一体カービイに何をしたんだ……
……ん?)

カービイの背中(?)になにか手紙か何かのものが貼りついている
ことに気づく。

「あら……?何でしょうか、この紙」

ゼルダも気づいたところ、僕はそれをはがし手に取る。

「え〜と何々……」

” お前の仲間を貸してくれてありがとう……といたいところだが、

こいつはとんだ暴れモノだった。

生態などを詳しく調べたかったが、他の研究材料の安全を案じてこいつを君に逃がすことにした。

しかし珍しい生き物に出会えたことの感謝の印として、君に今回の事件の殺人現場の捜査の許可を取れるようにしてあげよう。

現場に白衣の老人がいただろうか？この手紙を彼に見せればきっと現場に入れてくれるはずだ。

グッドラック”」

この手紙に名前の類のものは一切書かれていなかった。

「あいつ……最後まで何者が分からなかったな」

<手紙>を法廷記録に入れた。

『でもこれでちゃんと現場を捜査できるってことじゃない！早速そこへゴーよー！』

- 12月31日 午後8時15分 -
- ポケモンスタジアム ゴミ捨て場 -

「やっとここに戻ってこれたな」

『まったくよ。最初の目的地に入るのにどれだけ寄り道したか……
あらっ、』

プリンが何かに気づく。

「どうかしたの？……あっ！」

僕も彼女の目線を追った先に見えた。

捜査官たちが現場で帰りの支度をしているところを。

「まずい！早く搜索する許可を取らないと・・・」

僕たちは駆け足で現場へ急ぎ、テープも飛び越える。

そのとき、あの老人が再び走ってくる。

「クオリヤアア!!!」

わしらが・・・いなくなる・・・ゲホツ・・・時間でも・・・ハ
ア・・・立ち入り・・・ヒイ・・・禁止じゃ・・・って

また君たちか!!!」

「また会いましたね、オーキド博士」

「む・・・何か自信をつけたような顔じゃな」

「そのとおりです・・・では早速」

「くらえ！」

<手紙>

「何じゃ・・・この紙切れは。」

むむ・・・なんと！

珍しい生き物の生態を・・・興味深い。実に興味深い」

(くいついて欲しいところはそこじゃないんだけど・・・)

「・・・分かったわい。」

現場に入ること許してもいいのじゃが・・・何者なのかね。君
たちは」

<弁護士バッチ>

「・・・弁護士です。明日の法廷でピカチュウの無実を証明する・・・ね」

「なんと・・・君が明日の弁護士なのか！

・・・と、なると グリーン と顔をあわせることになるわけじゃないな」

「ぐりーん・・・？」

「ワシの孫じゃよ。

スゴ腕のトレーナーじゃが、最近はわしの研究に協力しているのう。

腕試しとしてこのポケモンリーグを企画したのはグリーンなのじゃないや」

（腕試しで大規模の大会を開くとは大胆だな・・・）

「あれ・・・でも何故それで、僕が彼と顔をあわせることになるんですか？」

老人は少し得意げに笑う。

「ふっふっふっ・・・」

それはグリーンがこのポケモンリーグの企画者の代表として
明日の法廷の 検事 をやることになったのじゃ!」

「け・・・検事ですって!」(・・・となると、今回の相手はリン
クじゃないのか?)

「しかし君がああのピカチュウの弁護士だとは、ちと可哀想じゃ。
グリーンはワシに似て非常にキレるからもう!
ハッハッハッ!」

(・・・祖父に似ているかはともかく、厄介な相手ではないことを
祈ろう)

そう思いふけているとき、背中にカービィがひつつく。

「ペポ〜！」

「え？ああ！そうだった！」

許可も得たところだし、現場を捜査させてもらっても構いませんよね？博士」

「ウム！もちろんじゃ。」

だがワシも早くここから離れて、明日の法廷の準備と来月の研究発表会の内容も決めんといかん！

あまり長居はしないこと！」

（本職のプログレスは滞っているようだ・・・）

<調べる>

現場は粗大ゴミの山以外、目立った箇所は無かったが地面の方に目を凝らすと人型に白線が描かれていることが分かる。

「まさよし氏の遺体はここで発見されたのですか？」

「そうじゃ。」

死亡推定時刻や詳しいことはまだ検証中じゃが、

死体は今日の 午後5時半前後 に発見されたいのう」

（午後5時半前後！ ということは僕とゼルダたちがポケモンセンターからこのスタジアムに戻って来たころか）

「死体が発見された・・・つまり誰かこの粗大ゴミの山に来て、この場所で死体が寝ているのを見たということですね。しかし一体何故わざわざここに・・・？」

「君の言うとおり第1発見者がこの場所に足を運んできたのは少し不自然なことじゃが、それは明日の裁判で証言されることじゃろう」

（第1発見者か・・・ 法廷で証言を崩さない限り、ピカチュウの弁護は難しいだろうな）

僕がそう思いつめているとき、

カービィを抱えたゼルダが死体の白線に近づてしゃがみこみ、よく調べる。

「！ 頭部に血の跡が付いていますね・・・」

「え？」

僕も近づいて見ると彼女の言うとおり白線のワクの中、アタマがなぞられたと思われる部分に赤い血のような跡ベツトリが残っている。

「そうじゃ。我々が来てまさよし君を調べたところ、後頭部からひどく出血 しているのう。」

彼はおそらく勢いよく 撲殺 されたと見ていいじゃろう」

「撲殺？・・・しかしピカチュウのような、小さなポケモンにそんなことをする力なんてあるんですか？」

「・・・確かにピカチュウというポケモンは体が小さく、腕力などは比較的低いほうじゃ。」

じゃが捜査官たちと一緒にこのゴミの山をスミズミまで洗ったところ、

小動物でも彼を撲殺することをジユウブンに出来る証拠 を見つ
けてしまつてのう」

「!？ 何ですつて！」

僕は急いでこの現場にあるものを見渡したが、ピカチュウが手にと
つて被害者の後頭部を強打できるものは見つからない。

(一体どんな証拠なんだ・・・？しかも ピカチュウがジユウブン
な勢いで彼を撲殺できる とされるもの・・・)

<死体のメモ>を法廷記録に入れた。

チャーン チャララーンラ チャーラーン (テテテテッ
テッテッ)

オーキド博士のフトコロから愉快的な電子音楽が鳴る。

「ムッ。電話がワシを呼んどるわい」

ピッ

「あっ！今、博士が取り出したアイテムは、”ケータイ”という
ものですよね、マルス？」

「お。良く分かったね」（ゼルダがアレを知っていたとは、意外だ。
・・・）

”ケータイ”でしばらく会話をしたあと、博士はそれを切ってフト
コロに戻る。

「いやあ、すまない君たち！」

ワシの研究所の方で何かトラブルがあったらしくてのう・・・ワシは急いで戻らないとイカン！

セツカク来たのに申し訳ないが、ここから出て行ってもらわないとダメじゃ！」

「と・・・トラブル？」

「・・・そうですね。もっと調べていきたいけど、帰らせてもらいます」

『ま、マルス！？ ダメよ、もっと調べていかなきゃ・・・！ムッ！？』

僕があっさり了解したことに、プリンが抗議する。

しかしその彼女の口を押さえるように彼女を抱き上げ、この場の出口へと向かう。

「それでは、オーキド博士。わざわざ捜査させてくれてありがとうございます。じゅいします。」

・・・また明日の法廷で会いましょう」

「うむ。そうじゃな」

僕たちはお互いそう言い残し、ゴミ捨て場から去った。

そしてゴミ捨て場の外

『ちよつと・・・ちよつと！腕を離しなさいよ！
私を抱き上げていいのはカービー様だけよ！』

（彼が一体どうやって君を抱き上げるといつんだ・・・）

プリンは僕の腕を振り解いたあと、地面に降りて睨んでくる。

『とにかく！結局、死体の置かれてた場所しか調べなかったじゃない！』

もっと粗大ゴミの置かれた山とかを調べたほうが・・・』

「いや、その必要はないさ」

『・・・え？何で？』

彼女はファルコが豆鉄砲を食らったような顔をする。

僕は説明を始める。

「いい？」

さっきのオーキド博士の話によると、あのゴミの山はスミズミま
で調べたそうだ。

それを僕たちが調べたところで、何か新しいものが顔を出すとは

思えない。

・・・特に証拠になるものは捜査官たちが持って行って、明日の
法廷に提出されるハズだしね」

『む・・・確かにそうだけど・・・』

「でもそれだけじゃない」

『え?』

僕は後ろの方に振り返る。

「あの現場にあった、一つの 大きなムジュン ……。」

「それをゼルダ。君が見つけてくれたんだよ」

そう。

あの現場にあったものと、オーキド博士にもらった証拠。

この二つを照らし合わせると、この事件の最初のムジユンが浮かび上がる。

発見してくれたゼルダもきつとこのことに・・・

「えっ！ 私が何か見つけたのですか・・・？」

・・・気づいていなかった模様で。

「・・・これは明日の裁判で説明するよ」

「ちょっとマルス！ イジワルしないで教えてください！」

~^UJU~

1日目・探偵パート後編（後書き）

オーキド博士の着メロは初代ポケモンのサウンドトラックに収録されている。「マサキのもとへ」ハナダより」という曲です。

ニューゲーム開始時にオーキド博士に自分の名前を教えるときに流れるBGMでもあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0493w/>

【スマブラ】逆転王子【逆転裁判パロ】

2011年11月28日07時46分発行